

# 比較文化論

No. 34

日本比較文化学会第38回全国大会  
2016年度日本比較文化学会国際学術大会  
発表抄録

於 弘前学院大学

2016年5月21日(土)

日本比較文化学会

**The Japan Association of Comparative Culture**

(海外提携学会)

韓国日本文化学会

台湾日本語文学会

**第38回 日本比較文化学会全国大会**  
**2016年度日本比較文化学会国際学術大会**

日時：2016年5月21日（土）

会場：弘前学院大学1号館1～4階（受付<1階玄関>・総会・シンポジウム・研究発表）

8：45 受付開始

9：15～10：00 総会（途中で理事会をはさむ） 414教室

10：00～11：50 シンポジウム 414教室

テーマ：「比較文化の方法論」 ※各パネリストの発表時間は10分です。

司会 高橋栄作（高崎経済大学 准教授）

パネリスト

- |              |                       |
|--------------|-----------------------|
| 1.（台湾日本語学会）  | 落合由治（台湾日本語学会 理事）      |
| 2.（韓国日本文化学会） | 大谷鉄平（韓国日本文化学会 理事）     |
| 3.（中四国・九州支部） | 八尋春海（西南女学院大学 教授）      |
| 4.（中部・関西支部）  | 木田悟史（三重大学 人文学部 特任准教授） |
| 5.（東北・関東支部）  | 熊谷摩耶（湘北短期大学 専任講師）     |

11：50～13：00 昼食（この時間帯、学生食堂「ライト・ホール」は開いておりません。）

13：00～17：00 研究発表（ただし、第1会場のみ12：25から開始）

研究発表会場には、研究発表用の機器が設置されており、パワーポイントなどの使用も可能です。

第1会場 414教室 ・ 第2会場 401教室 ・ 第3会場 304教室 ・ 第4会場 305教室  
第5会場 320教室 ・ 第6会場 218教室 ・ 第7会場 204教室 ・ 第8会場 115教室

17：00～18：00 特別講演 礼拝堂

講師：エドワード・フォーサイス先生（弘前学院大学 准教授）

演題：日露外交の隠れた側面

司会：佐藤和博（弘前学院大学 教授）

18：00～20：00 懇親会

会場：学生食堂「ライト・ホール」

会費：一般会員 5,000円、学部生 4,000円

準備の都合がありますので、お手数ですが、ご参加いただける方は**5月13日（金）までに**会費を以下の口座にお振り込みくださいますよう、お願い申し上げます。多くの方のご参加を期待しております。

銀行名：ゆうちょ銀行 弘前支店（ひろさきしてん）（店番：229：二二九店（ニニキュウ店））

口座番号：02210-3-69765（当座）

口座名義：日本比較文化学会東北支部 佐藤 和博（さとう かずひろ）

※他金融機関からの振込みの場合

口座番号：0069765（当座）

お問い合わせ先：〒036-8577 青森県弘前市稔町13-1 弘前学院大学 佐藤和博研究室

【シンポジウム：「比較文化の方法論」】（会場：414 教室）  
（パネリスト発表論題一覧）  
10：00 ～ 12：00

司会：高橋 栄作（高崎経済大学 准教授）

(1) 比較文化の方法論

落合 由治（台湾日本語文学会 理事）

(2) Edward Sapir の意味論の、現代言語学への寄与に関する一考察  
—比較文化の方法論としての再照射を中心に—

大谷 鉄平（韓国日本文化学会 理事）

(3) フィールドワークによる比較文化研究

八尋 春海（西南女学院大学 教授）

(4) ラフカディオ・ハーン “Ikiryō” の再話手法  
—「影」を中心に—

木田 悟史（三重大学 人文学部 特任准教授）

(5) 比較文化学の可能性

—18 - 19 世紀英中交流史研究を例に—

熊谷 摩耶（湘北短期大学 専任講師）

## 比較文化の方法論

落合 由治 (台湾日本語文学会 理事)

今までも比較を方法にした様々な研究が行われてきたが、その基本にあるのは資料の言語表現等の表現ジャンルの中から取り出された特徴と言える。

比較言語学、比較社会学、比較文学、比較メディア論…… 様々な比較のジャンルが考えられるが、それぞれ主に使用している資料は言語表現を含むマルチモーダルな特徴をもった表現物で、しかもそれは特定の社会的ジャンル性を持った表現物である。

社会的ジャンル性を持った表現物という点から、比較しようとする対象を考察することで、より考察すべき対象は限定でき、また方法も具体化することができる。表現のジャンルについて、初めて具体的考察をおこなったミハイル・バフチンは、以下のように述べている。

各時代および、各社会的グループは、日常生活のイデオロギー的交通に使うことばの形態の目録をそれぞれに有している。同種の形態辞のそれぞれ、つまり日常生活のことばの各ジャンルには、独特のテーマ群が適応している。交通形態（たとえば仕事に直接交わす技術関係の交通）や発話形態（短く事務的な受け答えのことば）と、そのテーマのあいだには、不即不離の関係がある。したがって、発話形態の分類は言語的交通の形態の分類に立脚しなければならない。（中略）ことばの作法、ことばの駆引き、発話を社会の階層的組織に適応させるもろもろの形態は、日常生活の基本的ジャンルをつくりだす過程で重要な役割を果たしている。（ミハイル・バフチン／桑野隆訳（1989/1994）『マルクス主義と言語哲学 改訳版』 pp.33-34）

バフチンのジャンル論を元に、今回は、具体的なマルチモーダル表現として、新聞の紙面デザインを例にして、比較文化論的考察をおこなう。

**Edward Sapir の意味論の、現代言語学への寄与に関する一考察  
—比較文化の方法論としての再照射を中心に—**

大谷鉄平（韓国国立江陵原州大学校 招聘教授）

Edward Sapir (1884-1939)<sup>1</sup>は、言語学史<sup>2</sup>上、「サピア=ウォーフの仮説」、「アメリカ構造主義言語学」等の範疇内で挙げられるが、一方、現代言語学の潮流においても、Sapir の言語理論、特に意味論への寄与は、随所に垣間見られる。本発表では、比較文化の視座より、Sapir の意味論を再考したい。

①「比較文化」への私見（発表者の個人的経験に基づく見解の提示）

「文化、社会、言語、人間」の相互連関性ならびに影響性は疑いないが、そこへの「気付き」たるや、幾多の学術的言説の閲覧に比し、「実際に体感する」方法により醸成されるかと考える。

②Sapir 『言語』 および意味論的特性

Sapir 『言語』 や意味論上の功績に関し、加藤（1990、1992、1999）<sup>3</sup>の報告があるが、その要点は、かつての伝統文法、あるいは 20 世紀半ばから発生する生成文法、さらには認知言語学、語用論といった諸々の学術的方法論とも一線を画した、「客観的に観察可能な形式的・分布的特性に基づいた分析」との特質として記すことができよう。一方、加藤（2015:14-15）は、Sapir の意味論上一貫した理念として、言語的意味の総体を i 論理特性、ii 心的過程としての kinaesthetic feeling（運動ないしは各種の等級付けに関する感覚）との側面に分けたうえで、後者への注目が最大の特徴であると指摘している。

③Sapir の意味論に対する、比較文化的視座からの整理

Sapir 『言語』 では、意味に関わる議論の随所に、比較文化的方法論が確認される。本発表では、岩波版『言語』、あるいは Sapir の言語理論に関し考察した複数の論考を参照するとともに整理し直す。また、その際、＜意義素＞の概念（服部四郎による）も補助的に援用し、包括的な観点からの記述を行う。本発表は、Sapir による意味論の現今での有効性を示し、その比較文化的特質を浮き彫りとするものである。

<sup>1</sup> Sapir の存在は、紀伊国屋書店『言語』（1957、泉井久之介訳）、岩波書店『言語』（1998、安藤貞雄訳）等より知られる一方、「日本エドワード・サピア協会（<http://edwardsapir-japan.sakuraweb.com/>）」の存在も注目に値する。

<sup>2</sup> ミルカ・イヴィッチ（早田輝洋・井上史雄訳）『言語学の流れ』（1974、みすず書房）pp.321-348。また、ジョルジュ・ムーナン（佐藤信夫訳）『二十世紀の言語学』（1974、白水社）pp.98-114, 143-145, 262-264。

<sup>3</sup> 加藤泰彦（1990）「サピアのGradingとその拡張について」『ニューズ・レター』第4号、日本エドワード・サピア協会、pp.17-26。同（1992）「サピアのTotalityと否定について」『ニューズ・レター』第6号、日本エドワード・サピア協会、pp.38-47。同（1999）「サピアの『言語』におけるEconomyの概念についての覚え書」『研究年報』第13号、日本エドワード・サピア協会、pp.61-65。同（2015）「サピア意味論三部作」『研究年報』第29号、日本エドワード・サピア協会、pp.13-29。

## フィールドワークによる比較文化研究

八尋 春海 (西南女学院大学 教授)

ゴルバチョフ大統領の尽力による冷戦の終結により、20世紀末には世界的に国際関係が改善されていたものの、ここ数年は悪化の一途を辿っている。新たな傾向として、インターネットを通して非難の応酬がなされるようになったということがある。誰もが指先だけで世界に向けて自分の意見を出すことができる時代となった。

しかし、他国のことについて批判的な書き込みをしている人々は、どれだけ相手の国のことを知っているだろうか。現場を見たのか？非難をしている人々と直接に接触したのか？どこまで現実のものとして捉えているのか？自分の書き込みを読んだ人がどう反応しているのか分かっているのか？

「切り身文化」という言葉がある。牛、豚、鳥、魚などが殺される場面も見ることなく、スーパーで切り身の状態となった食材に直面しても、「(命を) いただきます」という実感が湧かないため、食べ物を粗末にしてしまうのだ。インターネット上で他人を批判する者は、根本においては、これと似ている。ネット上で批判をしても、現場に行かなければ実感は湧かないし、批判している本人と直に会わなければ、相手が背負ってきたものは理解できない。いや、現場に行って、直に本人に会っても理解することは難しい。仮にも研究を生業とするならば、「事実」に忠実でなければならないはずだ。確認できていないものは、「事実」ではない。まずは、「自分以外のことは分かっていない」という潔さが重要だ。

今回は、比較文化研究の手法として、書物やインターネット上の情報ではなく、自分の足を使ったフィールドワークについて、私自身が現在行っている研究を中心に論じていくことにする。

ラフカディオ・ハーン “Ikiryō” の再話手法  
— 「影」を中心に —

木田悟史 (三重大大学 人文学部 特任准教授)

ラフカディオ・ハーンは日本語の物語を英語で語り直し、欧米の読者に届けた。ハーンが依拠した原話は、ほとんどすべて特定されているので、現代の読者はハーンの英文と原話とを詳しく比較しながら読むことができる。豊富な先行研究が明らかにしているように、ハーンの再話手法は多彩である。日本独自の思想や習慣について、西洋の文物とのアナロジーも駆使しながら解説し、読者の理解を促そうとすることもあれば、逆にそれらを省いて、物語のエキゾチシズムやローカリティをあえて強調しているような例もある。ハーンの再話とは、日本文化と西洋文化との相違点と共通点を同時に探す行為だったといえ、読者もそのようにして読むことが求められる。

今回の発表では、数あるハーンの再話作品の中から “Ikiryō” (生霊) を取り上げる。“Ikiryō” の原話は、『新著聞集』中の一話「活霊咽を占」である。ある商家の妻が使用人の若者の才覚に嫉妬するあまり、いつか店を乗っ取られるのではないかという一方的な妄想にとりつかれる。その強烈な負の感情が生霊となり、毎夜寝ている若者の咽を締めて責め苛む。物語の基本的な筋は変わらないが、“Ikiryō” は分量が増えており、ハーンの改変が目立つ作品である。本発表は、その中の「影」に注目したい。原話では、若者の口から「家主の妻」とはっきり語られる生霊の姿を、ハーンは “the Shadow of a Woman” と書きかえた。

この「影」の導入により、“Ikiryō” は欧米の読者にも親しみやすい作品になったのではないか。「影」は古今東西の物語に馴染みの深いテーマである。また、ユング派心理学における重要な元型の一つであり、それに基づく文学作品や昔話の読解もよく知られているところである。

本発表では、原話と照らし合わせることにより、ハーンが施した主な改変とその効果を指摘するとともに、「影」をモチーフにした国内外の物語との比較も交えながら、それらとハーンの “Ikiryō” との相違点と共通点を探りたい。

比較文化学の可能性  
—18 - 19 世紀英中交流史研究を例に—

熊谷 摩耶 (湘北短期大学 専任講師)

比較文化学の方法論は実に多様である。さらに、その対象は言語、思想、文学、宗教、歴史など幅広い。また、複数の学問の領域をこえて比較検討を行う、いわば学際的な研究を行うことができるという特徴を有している。異文化への理解が求められている今、国内でも比較文化の名を冠した学科や講義も増えつつあり、比較文化学の必要性が高まっていく可能性を感じている。

そこで、さらなる比較文化学の可能性を探究するために、東西交流史、中でも 18-19 世紀の英中交流史の中でも、1793 年に初めて英国より清朝治下の中国に派遣された大使マカートニー (George Macartney, 1737-1806) を筆頭とした外交使節団、通称マカートニー使節団をめぐる研究を事例として取り上げ検討を行う。マカートニー使節団に関する研究を概観し、従来の研究がいかなる方法を用い、何を解明しえたか、その成果を確認したうえで、比較文化学の視点からはどのような研究が可能になるかを探りたい。

マカートニー使節団は、主に英中間の通商条件の改善や、中国大使館の設立をはじめとする経済・外交目的で派遣された。英国人として初めて、ときの皇帝である乾隆帝との謁見は果たすことが出来たものの、当初の目的は果たせずに帰国したことから、対中国外交の失敗例とされ、のちに起きるアヘン戦争に繋がる事件として取り上げられてきた。事実、マカートニー使節団に関する代表的な研究は 1920-1930 年代では主に東洋史や、英国史、若しくは外交史の区分などの歴史学、ときとして経済史の文脈の中で取り上げられることが多かった。1960 年代に入ると、使節団が持ち帰った中国情報に関する検討が徐々に行われ始めたが、それでも依然として外交史の一部として扱われることが殆どであった。

しかし、近年マカートニー使節団の持つ別の特徴に焦点が当てられるようになってきている。それは、使節団が英国に持ち帰った中国情報とその影響力、つまり英国における中国イメージ形成への影響である。そこで、使節団が記した中国に関する記録を取り上げ、団員たちの現地での経験を基にした中国情報は西欧諸国にいかなる影響を与えたのかという点を、その文化交流史にのみ限定して探してみたい。大使のみならず、侍従に至るまでの様々な身分の団員たちの記した私的な日記や書籍などの史料や、団員の描いたスケッチなどの視覚資料をも調査対象とし、総合的に分析を行う。

比較文化学の特徴の一つである学際的な側面を活かすことで、英中交流史の基礎を整理することができよう。また、比較文化学的見地から検討を行うことで、18 世紀英国の知識人層だけではなく、より普遍的に英国における中国像、ひいては異文化理解のプロセスが明らかになるであろう。以上より、多面的に文化事象を分析することで、使節団の再評価を行うとともに、比較文化学のもつ可能性についての検討を行いたい。

【研究発表論題】

第1会場：414教室 《言語学、日中文化、日本語教育》

司会：佐藤 和博（弘前学院大学 教授）

1. 12:25 ~ 12:55

日本における「第九」のメッカについて

山下 明昭（香川大学 教授）

2. 13:00 ~ 13:30

カナダの多文化主義と言語教育

高坂 京子（立命館大学 教授）

3. 13:35 ~ 14:05

日本語教育における自他文化への気付きと理解力養成の可能性

— 実践現場へのピア・ラーニングの導入を通して —

羅曉勤（銘傳大学 応用日本語学科 准教授）

荒井 智子（同・助理教授）

4. 14:10 ~ 14:40

複数言語者へ使用言語が及ぼす影響

— 非日本語母語話者への調査から —

東本 裕子（横浜商科大学 専任講師）

休憩（14:40 ~ 15:00）

司会：金志 佳代子（兵庫県立大学 准教授）

5. 15:00 ~ 15:30

中国人日本語学習者の「けっこう」の誤用の原因に関する考察

— 中国の日本語教科書分析から探る —

張琳（東洋大学大学院 博士後期課程）

6. 15:35 ~ 16:05

婉曲法から見る日中文化の相違

— 「生」、「老」、「病」、「死」をめぐる —

周 聖來（マカオ旅遊学院 講師）

7. 16:10 ~ 16:40

味覚形容詞の日英比較

— 「苦い」と「ほろ苦い」の転義用法を中心に —

山内 啓子（神戸松蔭女子学院大学 文学部 准教授）

【研究発表論題】

第2会場：401 教室 《英語教育、日本語教育》

司会：山崎 祐一（長崎県立大学 教授）

1. 13:00 ～ 13:30

副詞の「直ぐ」と「直ぐに」についての考察

— BCCWJにおける使用実態 —

陳 志文（台湾・国立高雄大学 東アジア言語学科 教授）

2. 13:35 ～ 14:05

外国人に対する防災教育

— 留学生に対する防災・聴覚情報認知度の再検討 —

公文 素子（高知大学 非常勤講師）

3. 14:10 ～ 14:40

「やさしい日本語」による防災士育成

奥村 訓代（高知大学 人文学部 教授）

休憩（14:40 ～ 15:00）

司会：山下 明昭（香川大学 教授）

4. 15:00 ～ 15:30

Teaching critical thinking and academic writing skills to Japanese university EFL learners

: A pedagogical perspective

ニール・ヘファナン（久留米大学 文学部 国際文化学科 准教授）

5. 15:35 ～ 16:05

アカデミック・ディベートを通して向上する経験者の英文の論理構成力に関する一考察

橋尾 晋平（同志社大学大学院 文化情報学研究科 博士後期課程）

6. 16:10 ～ 16:40

英語授業におけるアクティブラーニングと異文化理解

木塚 恵子（京都大学 非常勤講師）

【研究発表論題】

第3会場：304教室 《英語教育、中国語学、日本語学》

司会：高橋 栄作（高崎経済大学 准教授）

1. 13:00～13:30

待遇表現としての可能構文に関する一考察

林 青樺（台湾・淡江大学 副教授）

2. 13:35～14:05

古代漢文における目的語倒置について

邱 旭元（京都大学大学院 人間・環境研究科 博士後期課程）

3. 14:10～14:40

言葉表現の基本的単位に関する一考察

—表現使用の構成としてのマルチモーダル表現を巡って—

落合 由治（台湾・淡江大学 教授）

休憩（14:40～15:00）

司会：落合 由治（淡江大学 教授）

4. 15:00～15:30

発信力に力点を置いた英語教育の実践

—英語の知識を戦略的なコミュニケーションスキルにどう結びつけるか—

山崎 祐一（長崎県立大学 教授）

5. 15:35～16:05

「言語や文化」の学びに役立つ小学校「外国語活動」用英語絵本

木戸 美幸（京都光華女子大学 こども教育学部 教授）

6. 16:10～16:40

最小対立項の知覚処理時における生理指標

高橋 栄作（高崎経済大学 准教授）

【研究発表論題】

第4会場：305 教室 《文学・哲学》

司会：佐藤 豊（青森大学 教授）

1. 13:00 ～ 13:30

レプリカントの倫理学？

横地 徳広（弘前大学 人文学部 准教授）

2. 13:35 ～ 14:05

テキストの切断と接合  
— 太宰治の再話作品 —

藤原 まみ（山口大学 准教授）

3. 14:10 ～ 14:40

『よだかの星』のトルコ語翻訳における民俗的な翻訳方略

コチイート ズハル（筑波大学 人文社会科学研究科 国際日本研究）

休憩（14:40 ～ 15:00）

司会：横地 徳広（弘前大学 准教授）

4. 15:00 ～ 15:30

作られる作家のイマージュ  
— アルフォンス・ドーデ —

山根 祥子（九州大学大学院 比較社会文化研究院 特別研究者）

5. 15:35 ～ 16:05

ネイチャーライティングの観点から読み解く石牟礼道子  
— 故郷との対話を中心に —

曾 秋桂（台湾・淡江大学 教授）

6. 16:10 ～ 16:40

ウィリアム・ブレイクにおける<カトリック>の観念  
— 相反するものを繋ぐものとしての「煉獄」 —

山崎 有介（長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 外国語学科 教授）

【研究発表論題】

第5会場：320 教室 《東洋文化》

司会：野口 周一（足利工業大学 教授）

1. 13:00 ～ 13:30

「ケースによる現代社会」実践から見る可能性（ベトナムでの実践より）

雄谷 進（国際交流基金・日本語国際センター 専任講師）

2. 13:35 ～ 14:05

朝鮮美術展覧会と表象

— 作品における『郷土色』表現を中心に —

李 尚珍（山梨英和大学 准教授）

3. 14:10 ～ 14:40

20世紀前半における日本人が見た中国人女性の表象

— 「服装」に関する言説を中心に —

劉 玲芳（大阪大学大学院 言語文化研究科 博士後期課程）

休憩（14:40 ～ 15:00）

司会：近藤 俊明（東京未来大学 教授）

4. 15:00 ～ 15:30

中国の古代文献にみる拍手の起源

秦 睿澤（九州大学大学院 芸術工学府 修士課程）

矢向 正人（九州大学大学院 芸術工学研究院 教授）

5. 15:35 ～ 16:05

言語系統と民俗系統

— 19世紀欧州の学問的言説と日本文化 —

横道 誠（京都府立大学 専任講師）

6. 16:10 ～ 16:40

戦前南洋研究における文化伝播論

— 松本 信広と山本 達郎の著書に焦点を当てて —

カルロヴァー・ペトラ（早稲田大学 グローバルエデュケーションセンター）

【研究発表論題】

第6会場：218 教室 《韓国文化》

司会：松橋 幸代（忠南大学 教授）

1. 13:00 ～ 13:30

韓国における藤村研究

林盛奎（白石大 schools 教授）

2. 13:35 ～ 14:05

韓国高齢者労働力活用の現状と問題

— 老人社会活動支援事業を中心に —

朴基勲（ソウルサイバー大学 社会福祉学部）

3. 14:10 ～ 14:40

在日朝鮮人文学における朝鮮語文学の様相

— 総連と民団の機関紙を通して —

呉恩英（愛知淑徳大学 常勤講師）

休憩（14:40 ～ 15:00）

司会：李 尚珍（山梨英和大学 准教授）

4. 15:00 ～ 15:30

遠藤周作の作品にあらわれる韓国人観

松橋 幸代（忠南大学 日語日文学科 招聘教授）

5. 15:35 ～ 16:05

“独島 = 竹島問題” から見る日本文化の特質に関する検討

崔長根（韓国大邱大 schools 日本語日本学科 教授）

6. 16:10 ～ 16:40

近代朝鮮の「新女性」認識に関する談論

李京珪（韓国東義大学 教授）

李杏花（韓国慶星大学 講師）

【研究発表論題】

第7会場：204 教室 《日本文化》

司会：木鎌 耕一郎（八戸学院大学）

1. 13:00 ～ 13:30

産業・文化・学びのコラボレーション

— 他分野連携プロジェクトによる伝統文化への貢献 —

関口 英里（同志社女子大学 学芸学部 情報メディア学科 教授）

2. 13:35 ～ 14:05

日本の「あし文化」の多角的研究

— 日本人と「はきもの」の着脱2 —

栗山 緑（福岡大学 スポーツ科学部）

3. 14:10 ～ 14:40

母親の子育て環境と気分状態との関連

吉田 亜矢（東京純心大学 講師）

休憩（14:40 ～ 15:00）

司会：佐藤 静（宮城教育大学）

4. 15:00 ～ 15:30

企業が取り組む多文化共生

— ダイバーシティ・マネジメントの新しい幕開け —

郭 潔蓉（東京未来大学 モチベーション行動科学部 教授）

5. 15:35 ～ 16:05

日本の学校応援団に関する一考察

金塚 基（東京未来大学 専任講師）

6. 16:10 ～ 16:40

中国における日本サブカルチャーの受容

— 「癒し系アニメ」を例として —

田口 哲也（同志社大学）

李心媛（同志社大学）

【研究発表論題】

第8会場：115 教室 《英米および日本研究》

司会：熊谷 摩耶（湘北短期大学 専任講師）

1. 13:00 ～ 13:30

万葉集の三種類の英語訳の比較・考察

林 裕二（西南女学院大学 教授）

2. 13:35 ～ 14:05

学生評価のためのデジタルツール

鈴木 規巳洋（藍野大学 准教授）

3. 14:10 ～ 14:40

ロックハートコレクションの行方

— ケンブリッジ大学図書館までの道のり —

李増先（立命館大学 ポストドクトラルフェロー）

休憩（14:40 ～ 15:00）

司会：伊藤 豊（山形大学 教授）

4. 15:00 ～ 15:30

高木八尺：アメリカ研究の展開と日本研究の可能性

小林 竜一（早稲田大学 国際言語文化研究所 招聘研究員）

5. 15:35 ～ 16:05

和辻哲郎の日本語論再考：「ある」と「こと」の意義

藤岡 克則（大阪産業大学 教授）

6. 16:10 ～ 16:40

在日ブラジル人の自己確立

— ある日系ブラジル人二世の事例から —

田中 真奈美（東京未来大学 モチベーション行動科学部 准教授）

## 【研究発表論題と要旨】（第1会場：414教室）

1. 12:25 ~ 12:55

日本における「第九」のメッカについて

山下 明昭（香川大学 教授）

佐渡芸術監督指揮によるベートーヴェン「第九」公演が2015年12月14日（月）から関西を中心に計8公演＜歓喜の歌の曲目ベートーヴェン：交響曲第9番 ニ短調 作品125「合唱付」＞が開催された。上記8公演の中の12月26日（土）15時開演「オリックス劇場」での公演を拝聴した。

佐渡氏は、この公演の中で前日公演した「神戸国際会館こくさいホール」での様子と明日（12月27日（日）15時から）開演する「アスティとくしま」への誘いを兼ねて抱負を述べられた。その中で「日本の第9のメッカそれが徳島で～」と紹介された。

しかし、日本の第9のメッカ説には、先の「徳島県鳴門説」の他に「旧制東京第一高等学校寮歌説」や「香川県丸亀説」と多説があるのである。

本研究では、真の「日本の第9のメッカ」を明らかにすること、合わせて、この時代、俘虜に対してこのような演奏を可能にしたのは「日本が世界から野蛮国としての汚名返上を狙った説」や「指導者の人道的配慮説」などがあるが、これらについても明らかにしたい。

2. 13:00 ~ 13:30

カナダの多文化主義と言語教育

高坂 京子（立命館大学 教授）

カナダは英語とフランス語を公用語とするが、移民によってもたらされた言語や 11 の異なる語族に属する先住民の言語など、2011 年の国勢調査では 200 以上の言語が母語として報告されている。多文化主義政策のもと、それぞれの文化は対等なものとして扱われているが、言語的には二言語主義を推し進め、英語とフランス語のいずれでも公共のサービスが享受できるという制度上のバイリンガリズムを維持している。すなわち、「二言語主義の枠内における多文化主義政策 (a policy of multiculturalism within a bilingual framework)」(ピエール・トルドー首相〈当時〉の多文化主義宣言、1971 年)をとる国であり、そこでは言語と文化は分離されている。そうしたなか、移民の増加により公用語以外を母語とする人口が 20.6% (2011 年国勢調査) を占めるようになり、他方、フランス語母語話者が占める割合は減少して 2006 年には 22% となり、フランス語を第二言語として学ぶ中学・高校生も全生徒の約 44% にすぎない (Germain 2013)。

このように言語事情は複雑であるが、カナダの教育水準は高く、経済協力開発機構 (OECD) による国際的な生徒の学習到達度調査 (PISA) においても高い評価を得ている。教育は州の管轄下にあるので州ごとに違いはあるが、とりわけ筆者が 2015 年に客員教授として半年間滞在したブリティッシュ・コロンビア州はカナダの全 10 州のなかでも首位を占め、日本と近い数値を示している。しかし、両者の教育の方法はずいぶん異なる。多様な民族が混在するブリティッシュ・コロンビア州では、公用語である英語 (フランス語母語話者はフランス語) は必修であるが、第二言語の履修は任意であり、また履修する場合もフランス語のみならず、多彩な言語教育プログラムのなかから選択できる。希望者には目標言語 (主にフランス語) を使って他の教科を学習するイマージョン教育も行われ、成果を上げている。どの科目も、詳細な到達目標 (Prescribed Learning Outcomes) とそれを支える一連の総合リソースパッケージ (Integrated Resource Packages) をもとにカリキュラムが整えられており、統一教材ではなく、そうしたリソースを活用して教員がある程度自由に創意工夫を凝らした授業を組み立てることができる。現在、ブリティッシュ・コロンビア州では個別学習や IT 化を取り入れた大きなカリキュラム改革が進行中で、1 年~9 年生は 2016 年 9 月から全面的に新カリキュラムに移行する。また、教育ランキング (Conference Board of Canada, 2014) でブリティッシュ・コロンビア州に次ぐオンタリオ州やアルバータ州でも、州独自の教育改革を行い、目標を限定して首尾一貫して的成果を絞るなどして成果を上げてきている。

本発表では、こうした最近のカナダの状況を言語教育の視点から分析し、日本の英語教育の現状と比較対照することにより、そこから今後のどのような示唆が得られるのかを考察する。

3. 13:35 ~ 14:05

日本語教育における自他文化への気付きと理解力養成の可能性  
— 実践現場へのピア・ラーニングの導入を通して —

羅曉勤（銘傳大学 応用日本語学科 准教授）

荒井 智子（同・助理教授）

従来の外国語教育においては、スキル養成を主な学習目標としているものの、その目標を達成するためにどのような内容その教育現場で取り扱われるべきなのかは、あまり検討されていなかったように思う。一方、近年においては、グローバル化がより進んでいる中、自他の文化に対する理解力が非常に求められるようになっており、この自他文化理解力は、アメリカの外国語教育基準や、ヨーロッパの言語教育の指標であるヨーロッパ言語共通参照枠（CEFR）でも取り上げられている。つまり、自他文化理解力を外国語教育にいかに取り入れるかというのは、その現場において一つの大きな課題なのである。また、21世紀の今日においてより活躍を期待される人材に求められるものの一つとして“協働力”が挙げられることが見られることから、その育成を実現すべく、（羅・荒井・張 2015<sup>1</sup>）では、授業活動での実践方法として、池田・館岡（2007<sup>2</sup>）が示した“ピア・ラーニング”の導入が提案された。

こうした点を踏まえ、本発表では、ピア・ラーニングを教室活動を導入することによる、学習者の自他文化に対する理解力の養成や向上の可能性について探求したいと思う。なお、本発表における授業デザインの中心概念は、1996年にアメリカで提案された外国語学習の「全国学習基準」（National Standards）の基本概念である「communication」「cultures」「connections」「comparisons」「communities」の5Csを取り入れ、「台湾の文化や、台湾に存在する日本文化の表象、近隣地域の文化との相違などについて理解を深めつつ、ほかの学習者が興味を持てるようにそれについて日本語で分かりやすく説明ができること」と設定した上で、池田・館岡（2007）が提案したピア・ラーニングの概念に基づき、授業の進行方法をデザインした。具体的な教室内活動としては、学習者が得た知識を各自で付箋に書き出す（個人作業）→内容に基づき付箋をグルーピングする（グループ作業）→グルーピングしたものをグループごとに発表する（ジグソー形式）といったものが主体である。そして、こうした活動について、学習者のタスクシートと学習者に対するアンケート調査により分析を行った結果、5Csに基づいて制定された明確な学習目標と、それに沿うべく、授業デザインに協働学習を取り入れたことで、学習者は、言語スキル以外にも自他文化に関連する知識を身に付けることができたことがうかがえ、学習者それぞれに変化や成長の様子が見ることができた。

<sup>1</sup> 羅曉勤・荒井智子・張瑜珊（2015）「なぜ協働するのか—実践フィールドへの反省から21世紀日本語人材育成という学習目標に向けて」第9回協働実践研究会、タイ、チュラーロンコーン大学

<sup>2</sup> 池田玲子・館岡洋子（2007）『ピア・ラーニング入門—創造的な学びのデザインのために』ひつじ書房

## 【研究発表論題と要旨】（第1会場：414教室）

4. 14:10 ~ 14:40

### 複数言語話者へ使用言語が及ぼす影響 — 非日本語母語話者への調査から —

東本 裕子（横浜商科大学 専任講師）

複数言語を話すことが出来る話し手が、使う言語によって自身の態度や感情の表し方を変えらるという現象が近年観察される。日本語を母語とする日本語/英語二言語話者を対象とした調査からも、実際に使用する言語によって話し手の話し方や話す内容までもが変化することが多いという結果が得られた。その背景要因を探ると、言語と文化の密接な関係が浮かび上がり、文化背景の違いから言語によって同じ物事に対する解釈やコミュニケーションのスタイルに差が生じることがわかった。その結果として、話し手が意識的、無意識的に使用言語によって言動等を柔軟に変えていることもわかった。

また会話という行為を通して、人が単に情報を伝えるだけでなく、自分はどうのような人間なのかということを経々な言葉遣いで表現し、自己アイデンティティを常に構築し、また更新していることもわかった（東本, 2015）。

今回は、別の角度から言語の影響を調査するために、日本語を母語とせず、第二言語、または第三言語として日本語を話す 15 名の非日本語母語話者を対象とし、話し手が日本語からどのような影響を受けているかについて調べた。

本発表では、調査結果を紹介しながら、言語が話し手に及ぼす影響について論じると共に、この視点を言語学習に活かした L2self の研究についても検討したい。

なお、本研究は横浜商科大学学術研究会助成金を得ていることをここに記す。

#### 参考文献

東本裕子（2015）「使用言語による思考・表現方法の変容に関する一考察」『比較文化研究』  
No.118, pp.139-154

## 【研究発表論題と要旨】（第1会場：414教室）

5. 15:00 ~ 15:30

中国人日本語学習者の「けっこう」の誤用の原因に関する考察

— 中国の日本教科書分析から探る —

張琳（東洋大学大学院 博士後期課程）

日本語学習者の誤用や誤解を引き起こす原因はさまざまであるが、使用する教科書において用法の取り上げ方や説明が不足していることが原因の一つだと考えられる。特に、外国語教育として日本語を勉強し日本での滞在経験がない学習者にとっては、教科書での記述の有無が大きな意味を持つ。本研究は、中国人学習者の誤用や誤解がしばしばみられる「けっこう」を取り上げ、中国で出版されている教科書の中にどのように記述されているかを詳細に検討していくことで、学習者の誤用や誤解の原因の一端を探るものである。

分析の対象としたのは、中国の大学で幅広く使用されている5種類の日本語教科書である。これらの日本語教科書はすべて4冊構成になっており、第1冊と第2冊が初級学習者用である。従って、本研究で分析したのは各教科書の第1冊と第2冊、全10冊である。

張琳（2015）は日本で出版された初級教科書11冊に出現した「けっこう」の種類と用法を調査し分析したものであるが、先行研究（遠藤1983、渡辺1990、蓮沼2001、大野2002、播磨2014など）を参考に「けっこう」をまず形容動詞、程度副詞、間投詞の用法に分け、さらに形容動詞の機能を【行為遂行的発言】と【事実に基づく発言】に分けて細分化して考察を進めている。【行為遂行的発言】とは何らかの行為を成し遂げる働きを持っている発言をいい、【事実に基づく発言】とは何らかの事実や事態を述べている、真偽の判定可能な発言をいう（町田・加藤2004:34-35）。本研究もこれと同様の考え方と方法で調査を行った。

調査の結果、教科書の「けっこう」の扱いが適切でないことが判明した。まず用例としては、形容動詞13件、程度副詞6件が提示されていた。しかし形容動詞が持つ様々な意味・用法のごく一部しか提示されていなかったり、用例の説明がなかったり、単語の解説と用例の意味が一致しなかったりする問題が見られた。副詞用法のみの提示で、形容動詞用法には言及がない教科書もあった。さらに単語・文法の説明に関しては、5冊に記載があったが、そのうち2冊には現代ではほとんど使用されない名詞用法が説明されていた。「名詞、形容動詞、副詞」と紹介しながら、形容動詞の説明や例文しかない教科書もあった。

張琳（2015）は、「けっこう」の【行為遂行的発言】には話し手の要求の断念・許容・要求解除・断りなどがあり、【事実に基づく発言】には話し手の情報充足確認応答と情報充足応答などがあることを明らかにしている。しかし、今回分析した中国の教科書では単語の意味説明に止まっており、どのような会話の流れにおいて出現しているのか、どのような機能を持っているのかなどについての説明が非常に少なかった。

以上のことから、中国の日本語教科書には、学習者の「けっこう」に関する理解や習得に資する十分な内容が提示されていないことが分かる。中国人学習者の「けっこう」に関する誤解や誤用には、このような教科書の不備が関わっていることが指摘できよう。

6. 15:35 ~ 16:05

婉曲法から見る日中文化の相違  
— 「生」、「老」、「病」、「死」をめぐって —

周 聖來（マカオ旅遊学院 講師）

言語は人類の交流において最も主要な道具であり、各民族の文化と密接に関わっており切り離す事が出来ない。婉曲法は言語の中でも重要な構成部分であり、合理的に婉曲法を使用する事により、人間関係はさらに調和が保たれ、人と人との交流の、粘着剤のように、人間関係を円滑にするのに欠かす事の出来ない役割をなすのである。中国語にも古来より婉曲法があり、古代中国語の「曲語」が婉曲法にあたる。意図としては、会話の時に紆余曲折させ、本当の意を含ませつつ、直接的には物事を言わず、言語交流を達成するのが目的である。現代中国のレトリックにも遠まわし言う方法があり、特に対面して会話を行う時、婉曲法を使わないで交流した場合、会話はスムーズに行えないのである。日本民族も控えめで遠まわしに意味を持たせて、あまり言いふらすのを好まない特徴がある。日本語にも婉曲的な表現の仕方が多く、使用率も高く、これは他の民族には余り見られない。日常生活での会話において、婉曲的な表現は他人へのお願い事、要求、助け等の状況において通常使われる。これ等の表現方法は、社会背景上に潜んでいる日本文化が決定しているのである。

一般的に言えば、婉曲法は主に四つの会話機能を備えている。即ち禁句、礼儀、隠匿策略である。禁句的機能は皆が怖がる恐ろしい物事を、会話中に口に出せない場合に、婉曲法を代用して関連する物事を会話するのである。例えば、体の欠陥、死亡、内緒事等である。礼儀的機能は人々の交流において、相手方の感情を傷つけたり、不愉快にするような無礼と僭越さを避けるために使用するのである。中国人と日本人は共に面子を重んじるような、丁寧な言い方が言葉を使用して、相手方の面子に配慮し、自己が教養を備えている事を見せるのである。隠匿的機能とは婉曲法を使用し、言語の中に相手方が不愉快に思ったり、気まずいようなマイナス的な事柄のレベルを軽減させるのである。戦略的機能は、人々がコミュニケーションを取っている時、もしも、直接自分の態度や立場を表現できない場合に婉曲法を用いて表現するのである。そうする事により、不必要な言い争いを避ける事ができ、しかも、温和、ユーモア、風刺等の目的を達成する事ができるのである。たとえ日中婉曲法が言語機能や言語現象上共通する場所があったとしても、日本語と中国語の両言語の言語環境、表現方法、言語の特徴、文化の価値観等においては、やはり比較的大きな差異が存在している。中国語を母国語にして日本語を学んでいる者、或いは日本語を母国語として中国語を学んでいる者でも、日中を跨いで文化交流をしている間に婉曲法の使用を誤る事がある。勉強している者は、正確に適切な交流を行うため、日中の婉曲法の相違点を理解しておく必要がある。婉曲法の誤用を避ける事は、文化交流においてとても重要な意義を持っているのである。

本文は日中言語の「生」、「老」、「病」、「死」に対する四つの方面の婉曲法から対比研究を行い、文化の角度から中国語と日本語の婉曲表現を考察し、これらの言葉に含まれた相違点と共通点から、日中文化の共通点と相違点を検討してみたい。

7. 16:10 ~ 16:40

味覚形容詞の日英比較

— 「苦い」と「ほろ苦い」の転義用法を中心に —

山内 啓子（神戸松蔭女子学院大学 文学部 准教授）

味覚は五感の一つであり人間にとって重要な感覚である。一般に基本味とされる「甘塩（鹹）酸苦」は形容詞として味覚の意味表現に用いられるが、頻繁にメタファーとしても用いられる。ドイツ語の“sauer”の事例分析を行った最上英明（2002）、「アマイ」と“sweet”を比較した皆島博（2005）、共感覚として味覚表現の日英比較を行った岡本恵美子（2007）、「甘い」「辛い」の日中比較を行った崔、明愛他（2010）、また日韓瑞の味覚表現の比較研究を行った武藤彩加（2015）などを先行研究として挙げる事ができる。

英語の4味覚形容詞sweet, salty, sour, bitterもsalty以外は***bitter memories, sweet smile, sour face***などのように味覚以外の領域でメタファー、あるいは慣用表現として用いられることが多い。本発表ではこの中からbitterを取り上げ、日本語の「苦い」と「ほろ苦い」に着目して比較を行う。

英語で「苦い」の味覚の原義としてはbitterが用いられ、Merriam-Websterによると *being or inducing the one of the four basic taste sensations that is peculiarly acrid, astringent, or disagreeable and suggestive of an infusion of hops* とホップを例に挙げてその苦みが説明されている。また、OEDでは *obnoxious, irritating, or unfavourably stimulating to the gustatory nerve; disagreeable to the palate; having the characteristic taste of wormwood, gentian, quinine, bitter aloes, soot*:と顕著に不快さが指摘される。bitterの味覚形容詞としての原義的な共起は *bitter ale / almond / acorn / chocolate / fruit / lemon / melon / pills* などがあるが、むしろ *bitter truths, to the bitter end* などのように味覚領域外のメタファーとしての語義の方が多く展開される。対して日本語での「苦い」は「苦い薬 / 茶 / 野菜」などに用いられるが、「ほろ苦い」になると、ほろ苦い思い出、ほろ苦い恋、など原義の味覚領域外のメタファーとしての転義、心理的な領域への転用が顕著になってくる。また原義の「苦い」とは異なり「ほろ苦い」は味覚に対して肯定的に用いられるとあってよい。英語での「ほろ苦い」は通常 *bittersweet, slightly bitter*が用いられるが、「苦い」bitterの感覚語の派生としての用法あるいは多義性に特徴があるともいえる。

そこで、今回はこれらの語の原義と転義用法を英文学作品の中に見られるbitterで検証し、「苦い」と「ほろ苦い」の味覚形容詞に内包される味覚の概念から、転義用法とその意味領域の展開を日本語と比較しながら明らかにすることを試みる。

## 【研究発表論題と要旨】（第2会場：401教室）

1. 13:00 ~ 13:30

### 副詞の「直ぐ」と「直ぐに」についての考察 — BCCWJにおける使用実態 —

陳 志文（台湾・国立高雄大学 東アジア言語学科 教授）

日本語教育においては、副詞の機能は「用言」を修飾することであると教授するのが一般的である。したがって、日本語学習者は当然のごとく例（1）のような副詞「直ぐ」を用いて「忘れる」という動詞を修飾する文を使っている。

例（1）尚、近寄ってみても、その男にはこれといった特徴もない。すれ違っても、直ぐ忘れてしまいそうだ。どことなく、あの新羅の高官金押実を思わせるものがある。

（『役小角』黒須 紀一郎）

しかしながら、「直ぐ」のみならず、例（2）のように「直ぐに」を用いて「用言」を修飾する文もよく見られる。これに関してさらに「直ぐに」をキーワードとし、『現代日本語書き言葉均衡コーパス（BCCWJ）』を用いて検索してみたところ、639もの用例が検索された。

例（2）スタートの号砲の一〇分ほど前、若いクルーの一人が不注意で落水したものの、直ぐに救助して、集団の風上側から絶好のスタートを切った。

（『処女航海』原 健）

例（2）は、「直ぐ」を用いても自然な文ではあるが、「直ぐに」を用いる場合、後ろに「に」が付加されていることにより、なんらかの意味合いや意図が付け加わっていることが考えられる。これは例（3）例（4）のようにいわゆる副詞の後ろに語尾の「に」「と」が付加されるかどうかという問題であると考えられる。

例（3）「直々（に）」「即刻（に）」「余計（に）」…

例（4）「刻々（と）」「随分（と）」…

このように、副詞自身でも十分「用言」を修飾する機能が備わっているが、なぜ、後ろに「と」語尾、あるいは「に」語尾が付加されるのかは興味深い。以上のような問題意識をもとに本研究では、副詞の「直ぐ」と「直ぐに」の相違について考察した。

こうした研究では副詞の研究や副詞に後続する「と」「に」の研究の広がりにも寄与することが可能と考えられる。

## 【研究発表論題と要旨】（第2会場：401教室）

2. 13:35 ~ 14:05

### 外国人に対する防災教育 — 留学生に対する防災・聴覚情報認知度の再検討 —

公文 素子（高知大学 非常勤講師）

阪神淡路大震災から20年、東日本大震災発生から今年で5年目が経過した。この大災害をきっかけに全国各地で地域における防災への取り組みが見直されている。高知県でも例外ではなく、30年のうちに発生する確率が80%と予想されている南海トラフ地震発生に向けての準備が行われており、その必要性は、地震発生に伴い36メートルの津波被害が想定されていることから、喫緊の課題である。日本語教育の立場からも日本に滞在する外国人への防災教育は、安全な受け入れのための一つの大きな方策の柱となっている。

そこで、2年前の2014年に日本人学生と留学生を対象に災害や緊急時に聞く「音・サイレン」の認知度について、調査を実施した。その結果、日本人学生で約6割、留学生で約3割しか音・サイレンの意味を理解していないことがわかった。総務省の調べによると、阪神・淡路大震災では174人、東日本大震災では23人の外国人が犠牲になっている。より一層これらの被害を少なくするためにも、テレビや携帯電話などで、緊急性や身の安全確保を知らせる緊急地震速報などの音の理解と判断ができれば、被害を最小限に抑え、身の安全を確保することができる。

このことから本発表では、来日したばかりの留学生に防災に関する「音・サイレン」の認知度を調査し、これから始まる日本での生活を安全に送るため、留学生自身が「減災」「自助」に努め、留学生自身に「防災は、最大の減災」であることを周知徹底する防災教育の在り方を探る。

## 【研究発表論題と要旨】（第2会場：401教室）

3. 14:10 ~ 14:40

### 「やさしい日本語」による防災士育成

奥村 訓代（高知大学 人文学部 教授）

1995年1月17日、阪神淡路大震災は起こった。その時から「やさしい日本語」が叫ばれて、早や20年が経つ。その間に、病院や公共施設を中心に外国人、特に定住外国人を視野に入れた「やさしい日本語」による各種案内やパンフレット類の充実が見受けられるが、その主たる担い手がボランティアである点は一向に変わらない。

そして、我々日本語教育従事者は、ここぞとばかり日本語教育の重要性や、存在をアピールする場を得たようにも感じてきた。私自身も文化庁予算を貰って、地域のハザードマップ作成、定住外国人から旅行者向けの超やさしい日本語防災テキスト作成などをしてきた。また、ある所では、「コンピュータによるやさしい日本語書き換え支援システム」が開発されたり、「HUG ゲーム」などの緊急時対応ゲームなども普及し、やさしい日本語と防災意識は高まってきている。

しかし、以下のような現状が拭い去れないでいる。

- 1 「やさしい日本語」は、確かに関係者には定着しているものの、老人を中心とする地域日本人住民には、さほど普及していないのではないかと？
- 2 HUG ゲームも有意義だが、実際に想定外のことばかりの中で、誰がリーダーシップを取ってやっていけるのだろうか？（人数的にも日本語教師ではない。）
- 3 外国人との共生を視野に入れる時、防災知識とやさしい日本語知識と異文化理解知識を兼ね備えた人材が地域にいるのか？

そこで、今回着眼したいのが地域防災士の存在である。

日本語教師よりはるかに人数が多く、防災に関する専門知識も既に持っている地域住民である。この人たちが「やさしい日本語」を理解してくれれば鬼に金棒ではないかと思うに至った。

また、一方で、定住外国人に「やさしい日本語」で防災士養成を行えば、やさしい日本語普及と防災知識の一石二鳥では無いかと考えた。

本日は、この防災士に関する実践報告を、「やさしい日本語」の本家本元の弘前で行えるのも何かの縁であると思っている。

4. 15:00 ~ 15:30

**Teaching critical thinking and academic writing skills to Japanese university EFL learners:  
A pedagogical perspective**

ニール・ヘファナン（久留米大学 文学部 国際文化学科 准教授）

With the massive changes globalization brings to the world, university students today are forced to deal with these changes by adapting their learning strategies and the goals they have for their futures. In a similar vein, teachers of English as a Foreign Language (EFL) must also adapt their teaching styles and methods in order to suit the students in their classrooms; for in order to successfully prepare them for the rapidly changing world we live in, we must do our utmost to prepare our students for what they may face outside the classroom (Oi, 2005; Tanaka, 2009).

Students who are hoping to gain entrance into universities in America or Canada now have to write an academic-style essay for the Test of English as a Foreign Language (TOEFL). Many of these students are well aware of the preferred rhetoric styles required in TOEFL: introduction, a main body with supporting ideas and concrete examples, followed by a logical conclusion. One approach that works with EFL learners of English is the process writing approach (Lee, 2008). Since the emergence of the process writing movement, intervention by a teacher during students' writing process has been recognized as assisting students in advancing to more complete stages of the writing process (Grabe & Kaplan, 1996). Even though the process writing approach facilitates a writer's creativity and idea generation (Lam, 2013), novice writers – like the majority of Japanese undergraduate university students – might feel more comfortable with being given instruction on how to form a pattern for constructing compositions.

This presentation looks at a critical thinking and academic writing skills course designed for Japanese learners of English. The study presents two sets of data from the 87 participants who took part in the course from 2009-2014. The participants were 2<sup>nd</sup> to 4<sup>th</sup> year students at a medium-sized Japanese national university in the southwestern part of Japan. The guiding principles behind the teaching methods used throughout the course will be outlined, as well as the theories behind these principles.

Turning to the results, the first data set is concerned with actual writing samples from multiple drafts of a medium-sized research project carried out by the student participants. Some specific examples of these writing samples will be shown to attendees: both before and after writing samples. The second set of results is derived from a self-assessment survey given to the learners both at the beginning and end of a 15-week semester.

The results of the study further demonstrate that the course taken by the 87 students was successful in that it prepared the students for honing their critical thinking skills and writing an academic paper in English. Further, results from a satisfaction survey given to learners at the end of the course affirm the effectiveness of the teaching methods used during the course; the vast majority of the students were extremely satisfied with the manner in which the course was conducted and in their ability to write an academic paper at the end of the course.

The presentation will conclude with some pedagogical implications for both Japanese and other Asian EFL learners and how the methods used in the EFL course described within can be replicated elsewhere. Finally, some limitations of the study will be outlined.

## 【研究発表論題と要旨】（第2会場：401教室）

5. 15:35 ~ 16:05

アカデミック・ディベートを通して向上する経験者の英文の論理構成力に関する一考察

橋尾 晋平（同志社大学大学院 文化情報学研究科 博士後期課程）

橋尾（2015）では、アカデミック・ディベート（Academic Debate; AD）の経験が、日本人英語学習者のライティング能力の向上に寄与するという点について、AD 経験者と非経験者に対して実施した英作文のテストの得点分析から主張した。ライティングの評価は、語彙や文法などに複数の要因によってなされるが、本研究では、AD を通して向上するライティング能力の中で、「論理構成力」に関して、橋尾（2015）で収集した AD 経験者・非経験者のコーパスを分析することで検討する。

文章の論理構成については、Halliday（1994）の主題題述構文の考え方が広く用いられており、川口・生内（2011）は、英語における主題構造と文章の一貫性の関連を指摘しており、上級学習者は、各節の文末の情報が次節の主題（文頭の要素）になる傾向が強く、話題が発展していく印象を与える一方で、中級学習者は、同じ主題が次節以降も主題として繰り返し現れる傾向が強く、単調な印象を与えるとも指摘している。また、Halliday（1994）の提案した主題は、テキスト形成的主題・対人関係的主題・話題的主題の3つに分類され、テキスト形成的主題は、接続詞や談話標識などが該当するが、田畑・松井（2008）は、文章の結束性を高めるために、接続詞や談話標識などの表現は効果的であると主張している。

これらの先行研究を踏まえ、本発表では、まず、川口・生内（2011）における上級学習者の主題展開パターンが AD 経験者の英文にも当てはまるかどうかについて、川口・生内（2011）の研究方法に倣い、橋尾（2013）の非経験者の英文との比較を通して明らかにする。また、この過程で収集された協力者の英文の主題のうち、テキスト形成的主題の頻度を集計し、経験者と非経験者のテキスト形成的主題の使用割合に差があるかについても分析する。

主題構造分析の結果、非経験者の英文では、同じ主題が繰り返し使われる主題展開パターンが見られ、先行研究同様、文章が単調になる傾向が強いことが明らかになる。一方で、経験者の英文では、節の題述部分の要素が、次節以降の主題として用いられる傾向があるなど、主題展開の幅が広く、100words 程度の英作文ながら、一定の話題の展開・発展が観察された。さらに、経験者は、テキスト形成的主題を使用する頻度が高く、文章に結束性が生まれ、橋尾（2015）のライティングのテストでの高評価に繋がったと主張する。

主要参考文献

Halliday, M, A, K. 1994. *An Introduction Functional Grammar*, 2nd ed., London: Arnold.

橋尾晋平. 2015. 「ライティング能力におけるアカデミック・ディベートの学習効果に関する一考察」『比較文化研究』116, pp. 207-217

橋尾晋平. 2016. 「アカデミック・ディベート経験者のライティングにおける語彙の実態に関する一考察」

## 【研究発表論題と要旨】（第2会場：401教室）

6. 16:10 ~ 16:40

### 英語授業におけるアクティブラーニングと異文化理解

木塚 恵子（京都大学 非常勤講師）

本発表は、昨年の第37回全国大会での発表（「異文化理解」と「外国語学習」—大学生の学びに焦点をあてて）に続くものである。

前回の発表では大学の英語授業で「異文化」をテーマに学習することの意義について考察し、以下のことをあきらかにした。

学習者は授業を通して異文化についての知識を獲得するだけでなく、自身の英語力にかかわらず認知・情意・行動それぞれの側面での変化を実感する。異文化をテーマにしたリーディングテキストの利用だけでもその変化は得られたが、異文化理解のいくつかの側面に関しては訳読以外の授業方法も取り入れることで、よりはっきりとした変化がみられた。

しかし前回までの研究では、より効果的に異文化理解を深めたのがどの授業方法であったのかを明確にするまでには至らなかった。本研究はこのことをふまえて、具体的にどのような授業方法により異文化理解のどの側面が深められたのか、その関連を明らかにするものである。

異文化理解には様々な側面があるが、本研究では前回同様に次の7項目を検証した。

- ① コミュニケーションスタイルの違いへの気づき
- ② 学びや多様な人との関わりへのモチベーション向上
- ③ 無意識だった自文化の意識化
- ④ 異文化に対する自身の態度や認識への振り返り
- ⑤ 異なる文化や価値観への尊重心や柔軟性
- ⑥ 予想外の価値観や文化摩擦への対処法熟考
- ⑦ うのみにしないcriticalな視点

これらの各側面がそれぞれどのような授業内アクティビティを通して深められたのかを検証することで、より効果的な異文化理解の促進とアクティブラーニングとの関連を考察するとともに、生涯にわたり主体的に考え協働する力を育成する英語授業へのヒントを得ることを目的とする。

## 【研究発表論題と要旨】（第3会場：304教室）

### 1. 13:00 ~ 13:30

#### 待遇表現としての可能構文に関する一考察

林 青樺（台湾・淡江大学 副教授）

現代日本語における可能構文は、いわゆる命題に属するカテゴリーであり、構文的・意味的な観点から論じられてきた。しかし、次の例文の示すように、いわゆる対人的モダリティを表わす可能構文も見られる。

- (1) この機械の使い方について簡単にご説明いただけませんか。
- (2) 最上階から夜景を眺めながら食事をお楽しみいただけます。
- (3) 18歳未満の方はご入場いただけません。

可能構文「お・ごーいただける／ーていただける」の表す行為の受益者について、従来の研究では話し手という指摘もあれば、聞き手が利益を受けるという指摘も見られることから、「お・ごーいただける／ーていただける」の意味機能がまだ明らかになっていないと言える。また、「お・ごーいただける／ーていただける」は、授受動詞「ーてもらう」の可能形「ーてもらえる」の敬語であるが、「ーてもらえる」とどういう点で共通していて、どのような相違点が見られるのか、両構文の関係について論じる研究は、管見の限り見当たらなかった。そこで、本発表は、「ーてもらえる」との対照をしながら、敬語と深い関わりを持つ行動展開表現の〈行動〉・〈決定権〉・〈利益〉の三つの観点に可能構文の〈可能〉を加え、この四つの観点から「お・ごーいただける／ーていただける」を考察した。その結果、以下のことが明らかになった。

- I. 可能構文の敬語「お・ごーいただける／ーていただける」は、依頼を表す時のみ〈決定権〉が「表現の相手」にある（例（1））。そして、行為のもたらす〈利益〉は、基本的には「表現の相手」にあるが、〈行動〉ができる状況を「表現の主体」が整えていて、「表現の相手」にその〈行動〉を実現させてほしい場合に、「表現の主体」が〈利益〉を受ける場合もある（例（2））。
- II. 「お・ごーいただける／ーていただける」は「ーてもらえる」の敬語であり、依頼を表す疑問文においては共通点が多く、ほぼ同じ機能を果たしていると言える。一方、平叙文においては〈行動〉の主体や〈決定権〉、〈可能〉の主体など、行動展開表現の観点から見ると、「お・ごーいただける／ーていただける」は「ーてもらえる」と異なる振る舞いを見せている。
- III. 「お・ごーいただける／ーていただける」の否定文（例（3））が表すのは「表現の主体」にとって望ましくない〈行動〉であるのに対して、「ーてもらえる」の否定文（例：なかなか信頼してもらえません。）の表す〈行動〉は「表現の主体」にとって望ましいものである。

2. 13:35 ~ 14:05

古代漢文における目的地倒置について

邱 旭元（京都大学大学院 人間・環境研究科 博士後期課程）

本発表は目的語倒置という特別な漢文文法現象について、どのような目的で起きるのかという問題点から考察し、より子細に目的語倒置の使用目的を究明したいと思う。現代漢文の場合、一般的に目的語を動詞或は介詞（日本語の助詞）の後ろに置く。しかし、古代漢文の場合は、目的語を動詞或は介詞の前に置くことがある。これは古代漢文の特別用法であり、本発表では目的語倒置と呼ぶ。

本発表古代漢文を調べ、古代漢文の目的語倒置として――①疑問代名詞を目的語にする。目的語を動詞または介詞（日本語の助詞）の前に置く。古代漢文疑問代名詞：何、誰、孰、安、焉、胡、奚、曷、盍。②否定句、介詞（日本語の助詞）を目的語にする。目的語を倒置する。否定副詞：不、弗、未、否、勿、毋、無、莫、非。③「之」または「是」を目的語と動詞の間に置く、感情を強調する。基本句式：O (NP) + 是/之/矣 + V ④目的語は方向名詞、助詞の前に置く。⑤目的語は疑問代詞ではなく、強調する為に助詞の前に置く。助詞「以」の場合が多い。⑥「相」の場合、述語動詞の前に置く。「人称代名詞」の意味で訳す。⑦「見」の場合、述語動詞の前に置く。「人称代名詞」の意味で訳す。⑧「自」の場合、述語動詞の前に置く。「自分」と訳す。以上の八種類をまとめた。以上の八種類の目的語倒置が起こった結果をまとめてみると、二つの目的があると考えられる。一つは、目的語の強調である。もう一つは、センテンスを分かりやすくするための調整である。

人間の言語は、すべてが同一の形態的手段によって事態を表示することが出来ないこともその一因である。言語について、事態を構成する実体とその関係は必ず何らかの形態素によって表示されなければならないので、古代漢文の特別文法用法もこの理由で、古代の文人たちによく使われている。形態素配列規則が任意の言語に存在しなければならないのは、発信者が脳内で構築した事態と同一の事態を発信者が伝達する文によって受信者が理解する必要があるからであり、古代漢文の目的語倒置のような変形が必要となる。

## 【研究発表論題と要旨】（第3会場：304教室）

3. 14:10 ~ 14:40

### 言語表現の基本的単位に関する一考察 — 表現使用の構成としてのマルチモーダル表現を巡って —

落合 由治（台湾・淡江大学 教授）

言語研究のもっとも基本的な問題のひとつは、言語単位設定の課題である。文法論においても談話研究でも、近年、基本単位を巡る見直しや議論が盛んになってきているが、実は日本で言語研究が本格的に始まった1960年代にこうした議論は活発に行われており、再び研究が原点に回帰したとも言える。

様々な研究視点と方法が今まで文章・談話研究ともに発展してきたが、基本的考察は、言語表現あるいは、そこに観察される非言語行動に限定されており、ある具体的な表現主体が社会的に遂行している表現の基本的成立条件は研究のテーマには上っていない。

そこで、本研究では、今までほとんど検討されたことのない印刷メディアと映像メディアのマルチモーダル表現の基本的単位を考察してみたい。方法として、事例研究によって、それらの表現が実際の表現目的を達成するために用いている全ての表現要素をマルチモーダル表現として取り上げて、特徴と機能を検討する。そして、言語表現と非言語表現の関係を明らかにし、具体的表現主体が表現行為を遂行する際の基本的成立条件として、質的条件を基本的単位として設定する必要性があることを提示する。

同時に、言語表現について質的条件との関係で、その基本的単位を再検討する。言語をそれが使われている場と関連要素に戻して考察することで、より実態に即した表現の単位を見出していきたい。

キーワード：表現 言語単位 基本的成立条件 要素 マルチモーダル

## 【研究発表論題と要旨】（第3会場：304教室）

4. 15:00 ~ 15:30

### 発信力に力点を置いた英語教育の実践

#### — 英語の知識を戦略的なコミュニケーションスキルにどう結びつけるのか —

山崎 祐一（長崎県立大学 教授）

これまでの我が国の大学における英語教育は紆余曲折を経てきた。伝統的なグラマー・トランスレーション・メソッドからの脱却とともにコミュニケーションを重視した、いわゆる実践的な英語運用能力を獲得できる語学教育が強調されるようになってきている。高校では1994年度より「オーラルコミュニケーション」、小学校でも2011年度より「外国語活動」が必修として導入され、2020年度より5、6年生に対しては教科化されることになっている。文科省も「英語が使える日本人の育成」や「グローバル人材の育成」などを掲げ、実践的に活躍できる日本人の育成を目指そうとしている。

しかし、これまで、それらがどのような形でコミュニケーションスキルに結びついてきたかは疑問の残るところが多い。これまでの日本人大学生に対して実施したアンケートから判断しても、日常的なコミュニケーションにおいてでさえも、特に英語で発信していくことに関しては、苦手意識を拭えていないことが多いというのが現実のようだ。英語による発信を身につけていくには、言語的要素のみの教育に固執せず、広い国際的視野を持ち、異なる文化や習慣を持った人々と偏見を持たずに自然に交流し、異文化と共生していく資質や力量を養成することも重要な課題のひとつと考えている。目標文化圏の人々の考え方や習慣について正しく深く理解することにより、自文化中心主義や異文化に対する偏見的態度をなくし、英語による対等なコミュニケーションができる人材が育成される。英語教育の目的がいったい何なのかを考えたとき、それが、異文化の人々とのコミュニケーション能力を高めること、異文化の人々の思考方法や行動様式を知り、ひいてはそれを「国際理解」や「国際平和」につないでいくことであるのならば、コミュニケーションの言語的要素のみならず、社会文化的要素にも目を向けていくことが必要である。そして、それが真の地球規模のコミュニケーション能力に結びついていくのであろう。

本発表では、科研費（基盤研究C [平成26年度～29年度]）に係る研究課題に関連し、「学外」及び「海外」で発信力を異文化共生や国際交流とリンクさせた形で、「英語を使って何ができるのか」を学習者が「体験」を通して実感し、学習意欲のさらなる向上につなぐ取組について報告する。それぞれの活動サイトで得られた知見を学習の場にフィードバックし、さらに学び、それをまた現場に還元し、これを円循環的に展開する形で英語での発信力を身につけようとする大学生の活動を紹介する。この取組は、英語学習を異文化共生にどのように役立てることができるかというサービスラーニングの一環としても捉えている。

5. 15:35 ~ 16:05

「言語や文化」の学びに役立つ小学校「外国語活動」用英語絵本

木戸 美幸（京都光華女子大学 こども教育学部 教授）

2011年度施行の小学校学習指導要領（東洋館出版社）第4章の「外国語活動」は、その指導目標を「外国語を通じて、言語や文化について体験的に理解を深め、積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図り、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しませながら、コミュニケーションの素地を養う」こととしている。また、その学習内容については、1) コミュニケーションに関する事項 2) 言語と文化に関する事項、とに分けている。

2) に関して、小学校での教育に焦点をおいた研究開発は不十分であり、外国語活動を担う教員の経験値や、異文化に身近にふれることのできる地域的特性、あるいは豊富な経験を有した外部人材の確保、といったさまざまな要因によって、外国語活動内での「言語や文化」の学びには、学校間格差が生じる可能性が大きいと推察される。

英語の絵本は、1) イラスト 2) ことば 3) ストーリー、という絵本を構成する要素ゆえに、「言語や文化」面で、上記のような外的要因に左右されることなく、小学生に比較的均質な学びを提供できる優れた教材である。外国語活動の一環として「読み聞かせ」する絵本について、今回は、1) 日本語との違いに気づく作品、2) 日本文化との違いに気づく作品、という観点で選書した作品について、それぞれ実際に絵本を示しながら、相違点を説明する。1) では、音、とりわけ「オノマトペ」が多い日本語の特性を感じることが可能な日本語の絵本とその英語訳の試作版を紹介し、2) では、英米作家による絵本に多く見られる、就寝前のこどもの心理を扱った作品を紹介することで、英米と日本の就寝スタイルの違いに言及する。

英語絵本の「読み聞かせ」は、小学生に異言語・異文化にふれる機会を提供し、さらにその経験が、改めて日本語や日本文化を振り返り、再認識する機会となる。英語絵本が内包している「言語や文化」への気づきを促す大きな力ゆえに、「読み聞かせ」が今後の小学校外国語活動において果たす可能性について述べる。

## 【研究発表論題と要旨】（第3会場：304教室）

6. 16:10 ~ 16:40

### 最小対立項の知覚処理時における生理指標

高橋 栄作（高崎経済大学 准教授）

非常に複雑で高次の脳内活動を伴う言語認知活動において、神経生理学的な手法が近年用いられるようになってきた。萩原（2012）によれば、言語獲得は脳の発達と平行しておこなわれるという。シナプスの密度によって脳の発達がわかり、言語処理に関する大脳の機能は、人の成長に伴い聴覚野、ウェルニッケ野、ブローカ野の順でシナプスの密度が増していくという。この過程は、音声知覚と理解が産出に先んずるという点と一致していて非常に興味深い。さらに、萩原（2012）は、脳の前頭部と後方の頭頂をつなぐ弓状束が、乳幼児では背側経路が不完全であり、7歳から9歳以降にこの結合が強まるとした。また、この弓状束のつながりは人固有であるという。そこで、本考察では弓状束の発達が、言語獲得・言語習得において影響があるのではと考え、考察をおこなった。

言語獲得・言語習得といった研究領域では、これまで言語行動面からの行動指標を用いて「言語」を観察してきた。しかし、本考察では、認知過程をゆがめることなく記憶でき、時間軸に従って継続して生理測度が入手できる脳波を取り上げ調査した。弓状束が未発達の年齢では、外国語の音素の弁別は可能であろうか。Giannitrapani（1988）等他が主張する、Beta帯域波が思考状態を推定する指標として有効であるという先行研究に従い、小学校3年生（9歳前後）に対し、最小対立項を用いて音声知覚実験をおこなった。閉眼時の脳波を測定し、次に作業時の脳波を測定する。その脳波成分を比較調査し、音声知覚実験時には、どのような指標を示すのか。本発表では、その実験過程、結果、考察を示す。本考察では、容易に装着、計測がおこなえる簡易脳波計を用いて計測をおこなった。

1. 13:00 ~ 13:30

レプリカントの倫理学？

横地 徳広（弘前大学 人文学部 准教授）

アリストテレスが説明していたように、古代ギリシャでは「種差」による定義によって人間は「ロゴスをもつ動物」だとされていた。しかし、「記号」であれば、チンパンジーも使用可能であり、DNAを見れば、ヒトとチンパンジーのあいだでは2%も異ならないと言われている。あるいは人間を「共感する動物」と規定したヒューム倫理学を頼っても、現在ではボノボが「共感する霊長類」だと指摘される。こうして「種差」による定義も、ヒトを他の霊長類と比較すると、どこまでが人間なのか、その「線引き」は難しくなる。

しかも、「人間とは何か」という問いは、科学技術の進展にともない、いっそう答えることが難しくなっている。たとえば「BMI（ブレイン・マシン・インターフェイス）」と「義体」の作成技術が発展し、人間身体の「義体」化が広範に可能になれば、あるいは3DプリンタとiPS細胞、ES細胞による「臓器」の人工的製作が広範に可能になれば、人間身体はその部分部分をどこまでかは入れ替え可能である。そもそも、どこまで入れ替えても、人間は人間なのか。あるいは、脳をふくむ臓器をどこまでか入れ替えた「私」は、入れ替え以前の「私」と、どこまでが同じ「私」なのか。

「人間とは何か」という問いと「私とは何か」という問いが重なり合う場面である。

本発表ではこうした現代科学技術と生命倫理学の動向をふまえながら、フィリップ・K・ディック『アンドロイドは電気羊の夢を見るのか』（1968年）を原作に、リドリー・スコットが監督した映画作品『ブレード・ランナー』（1982年）の哲学的考察を行なう。この映画でヒロインとなるのは「レプリカント」と呼ばれた「人造人間（android）」だが、生命倫理学のターミノロジーをまじえて言えば、火星の過酷な環境で強制労働をさせるために「DNA操作」による「エンハンスメント」をほどこした人造人間がレプリカントであり、外見は人間と変わらない。そのヒロインが、自分は人間だと思って生きてきた。しかし或る日、自分は、他人の記憶を移植されたレプリカントだと気づいてしまう。哲学が人間の卓越を示す知的営為だとすれば、そのヒロインこそ、「私は誰なのか」と「私とは何か」という問いを重ね合わせて哲学し、そうして生きざるをえない存在なのである。

ロックの経験論的哲学では「人格的同一性」は「記憶の連続性」によって保証されていたが、では、そのヒロインは誰なのか？ そのヒロインも「私」という一人称単数の代名詞で自分を指示しているが、その人称代名詞は、誰を、何を指示しているのだろうか。これらの問いは、人間の記憶喪失という事象との比較可能性を思えば、「映画は虚構だから…」と言って済ませえない問題であることがわかる。

『ブレード・ランナー』の哲学的考察を通じて、人間とは何か、私とは誰で何なのか、このことの重なり合いに迫りたい。

2. 13:35 ~ 14:05

テキストの切断と接合  
— 太宰治の再話作品 —

藤原 まみ（山口大学 准教授）

太宰治の作品群には、他のテキストを元に創作した再話作品が多く含まれている。それらは原典となるテキストが明示されている場合と、原典となるテキストが明示されていない場合の二つに大別することができる。さらに、前者は原テキストが日記のような、人目にさらされることを目的として書かれていないテキストの場合と、古典などの文学作品を原テキストとする場合の二種に分けることができる。今回の発表でとりあげる「女の決闘」（1940）は翻訳作品を原テキストとする再話作品である。

「女の決闘」が依拠した翻訳作品は、1911年に出版された Herbert Eulenberg（1876-1949）の作品集 *Sonderbare Geschichten* に収録した *Ein Frauenweikampf* を、森鷗外が翻訳し、1912年に発表した「女の決闘」である。ジェラルド・ジュネットは翻訳を「言語的転移」と位置づけ、「あらゆる翻訳の行為は翻訳されたテキストの意味を変化させる」と述べている。太宰の「女の決闘」を考察するうえで、鷗外の翻訳行為と原典である Eulenberg によるオリジナル作品、*Ein Frauenweikampf* との関係は無視できぬ問題である。また、太宰が翻訳作品を介さずに原テキスト *Ein Frauenweikampf* を読んだのか否か、読んだのであれば、どう読んだのかについても考察すべき重要な点である。しかし、今回は、太宰の再話作品「女の決闘」はテキストの転移が二重に行われているテキストであることを確認するにとどめる。また、ジェラルド・ジュネットの定義に従い、*Ein Frauenweikampf* の翻訳である鷗外の「女の決闘」を *hypotexte*、太宰の「女の決闘」を *hypertexte* と呼ぶ。

「女の決闘」における転移は、太宰の他の再話作品とは全く異なっている。*Hypertexte* 太宰の「女の決闘」のテキスト内には、*hypotexte* 鷗外訳の「女の決闘」のテキストの全文がそのまま、ほとんど書き換えられることなく、包みこまれている。太宰が施した加工は *hypotexte* 鷗外訳「女の決闘」の切断である。7つのパートに分割された *hypotexte* と、その間に差し挟まれた太宰独自の言説によって、*hypertexte* である太宰の「女の決闘」は構成されている。また、*hypertexte* 自体も6つのパートに分割されている。

太宰の「女の決闘」は切断され断片化した *hypotexte* を含み込んでいるが、太宰独自の言説と *hypotexte* は混交することなく、個々の独立性を保って共存している。これら二種のテキストの境界は、行間を空けるなどによって視覚的に明らかにされている。つまり、*hypertexte* 「女の決闘」では *hypotexte* の切断面であり、同時に、*hypotexte* と太宰独自の言説とが接合されている境界面が、ことのほか強調されているといえる。そこで今回の発表では、「女の決闘」を文学的コラージュと考え、二種のテキスト—太宰独自の言説と *hypotexte*—が会う以前の部分、つまり、太宰独自の言説のみで構成されている書き出し部分、そして、太宰独自の言説と *hypotexte* との境界面を考察することによって浮かび上がる、*hypertexte*、太宰治の「女の決闘」の特徴を特定することを目的とする。

## 【研究発表論題と要旨】（第4会場：305教室）

3. 14:10 ~ 14:40

### 『よだかの星』のトルコ語翻訳における民俗的な翻訳方略

コチイト ズハル（筑波大学 人文社会科学研究科 国際日本研究）

宮澤賢治童話『よだかの星』は様々な分野で研究されてきたが、『よだかの星』の翻訳研究が少ない。本研究は2010年にはじめて翻訳された『よだかの星』のトルコ語訳を中心にする。『よだかの星』の他の言語における翻訳の多くは日本文化や日本文学に関心がある読者を目的としているが、子供の読み物として訳された翻訳は少ない。トルコ語訳はこうした翻訳の一つであり、2010年に『よだかの星』は宮澤賢治童話集の一編として翻訳された。これは、トルコにおける宮澤賢治童話の初めての翻訳であり、さらに、日本の童話として初めて翻訳された本でもあったため、大変重要だと思われる。

しかし、『よだかの星』のトルコ語訳では改変が観察された。ルフェーヴル・アンドレ (Lefevre, Andre) は翻訳は書き換えであると定義し、書き換えは何らかのイデオロギーやポエチックを反映していると解説した。従って、改変もあるイデオロギーを反映すると言える。本研究では『よだかの星』のトルコ語訳もあるイデオロギーで改変されていたのかを明らかにするために、原文とトルコ語訳を分析し、考察を行った。考察によりトルコ語訳は何らかのイデオロギーもなく、トルコの民俗に基づいたある表現の影響で書き換えられたことが明らかになった。

宮澤賢治童話の翻訳研究は主に言語問題が中心とされた研究であり、文化的、社会的、歴史的な側面を中心とした翻訳研究が少ない。本研究は賢治童話の翻訳研究を文化的観点から見、賢治童話の翻訳研究に貢献すると考えられる。

4. 15:00 ~ 15:30

作られる作家のイメージ  
— アルフォンス・ドーデ —

山根 祥子（九州大学大学院 比較社会文化研究院 特別研究者）

本発表では、フランス本国における作家、アルフォンス・ドーデのイメージを明らかにすることを目的としている。テキストと作者の関係性を切り離して考えることがまだ認知されていなかったと思われるドーデの生きた19世紀において、作家と自身の作品とは深く結びつけられ、作家像の形成に強く影響していた。更に、サロンの人間関係や自身の周辺の出来事までもが、作家のイメージに反映されることは往々にしてあった。それを最もよく表しているのがカリカチュアであろう。

リトグラフの発見もあり、フランスにおいてカリカチュアは1830年代に大きく花開き、1835年の検閲法によって政治風刺画が禁止されたのちも社会を風刺するカリカチュアが没了することはなかった。ウリエル・レシュフの指摘する通り、カリカチュアが「画家と民衆が現実に対して持っているイメージ」であり、カリカチュアの中に「事実に対する国民の感情」が込められているとするならば、ドーデのカリカチュアにも注目する値があるだろう。そこでドーデと同じ1840年生まれの風刺画家、アンドレ・ジルの作品を中心にカリカチュアに表れるドーデのイメージを考察する。

また、ドーデに関する言説を『ゴンクール日記』を中心に集め、ドーデに身近な社会である文学グループからドーデ像を探る。『ゴンクール日記』の中のドーデに関する記述はドーデのプライベートなことから作品のことまで多岐に渡り、当時の交遊関係までもが伺える一種のルポルタージュとなっている。例えば、ゴンクールの目を通したドーデの人となりはもちろん、ドーデの芸術性や死生観、ドーデ夫人との夫婦関係や父や兄との家族関係、ゾラら文人との交遊関係からそうした場での発言や告白などゴンクールが見聞きしたことが忌憚なく記されている。そこに浮かび上がるドーデ像には陽気な南仏の太陽を思わせる快活なドーデがいる一方で、どうなっても構わないと自暴自棄になっているような鬱々たるドーデがいる。

そして、日本におけるドーデ像も変遷をたどるとともに多様な意味合いを持っている。フランス本国で作られたドーデ像は、日本に受容される際にどのように変化したのか、ドーデという人物について語られ、作られる作家像を比較検討し、大衆、あるいは時代によって作られていくドーデ像の多様性を明らかにし、日本で作られたドーデ像に潜む意味を考える。

5. 15:35 ~ 16:05

ネイチャーライティングの観点から読み解く石牟礼道子『苦海浄土』  
— 故郷との対話を中心に —

曾 秋桂（台湾・淡江大学 教授）

日本で有名な小説家池澤夏樹が編集した『世界文学全集』（全30巻、河出書房新社）に、日本文学作品として、川端康成、大江健三郎、村上春樹の作品ではなく、石牟礼道子『苦海浄土』の一作品が取上げられ、第三集（2011）としてその列に加えられることになった。

岩岡中正は、公害の告発文学として知られた『苦海浄土』の作者石牟礼道子を文明批判者、反近代思想家としている。石牟礼道子は、一主婦として水俣病に毒害された故郷の水俣市（九州熊本県）の漁村の現状に目を向け、1969年に『苦海浄土—わが水俣病』を発表し、以後『苦海浄土・第2部「神々の村」』（2004）、『第3部『天の魚』』（1974）を加えて、一作品として完成した。現在、完成した作品として『石牟礼道子全集』第三巻、第四巻に掲載された『苦海浄土』を纏めて読むことができる。そこで、本発表では、特に創作が断絶し刊行が難しかった『苦海浄土・第2部「神々の村」』（2004）を対象に、ネイチャーライティング（nature writing）としての読みを実践することにする。

ネイチャーライティング（nature writing）においては、特に「場所の感覚」が重要視されている。通常なら、人間がこの世に生を享けて最初に触れた場所は、「故郷」とされ、人間はそこに対して特別な感じを抱いている。本発表では、その故郷を、「場所」（place）、「空間」（space）、「居場所」の三つのトポロジー（topology）に分け、故郷との対話に焦点を当てて、ネイチャーライティングの観点から『苦海浄土・第2部「神々の村」』（2004）を読み解いていく。

キーワード：ネイチャーライティング 石牟礼道子 『苦海浄土』第2部 故郷 対話

## 【研究発表論題と要旨】（第4会場：305教室）

6. 16:10 ~ 16:40

### ウィリアム・ブレイクにおける〈カトリック〉の観念 — 相反する者を繋ぐものとしての「煉獄」 —

山崎 有介（長崎ウエスレヤン大学 現代社会学部 外国語学科 教授）

ウィリアム・ブレイクは、『ヨブ記』への挿絵（1825年）の完成間近の頃、彼の才能を評価した画家ジョン・リネルの依頼で1824-1827年にかけて、「ダンテの『神曲』への挿絵」を描くことになる。この『神曲』への挿絵に取り組んだブレイクの『神曲』への挑み方は、ブレイクのカトリック的思想を垣間見るものであり、英国国教会やプロテスタントが主流を占めるイギリス社会の中では特異なものであったと言える。ギリシャ神話や原始宗教としてのグノーシス思想、スウェーデンボルグの影響もあることはもちろんではあるが、ミケランジェロの『最後の審判』の影響が深いブレイクのキリスト教観は「善」と「悪」といった単なる二元論ではない。その〈善なる極と悪なる極を結ぶもの〉、〈相反するものを繋ぐもの〉が彼の思想を形作っていると考えられる。初期の作品『無垢と経験の歌』や『天国と地獄の結婚』のように「相反するもの」が際立ち、ブレイクが二元論の典型であるかのように捉えられているが、それらの作品の中にも「相反するものを繋ぐもの」が描かれている。『経験の歌』の「ひまわり」（3部作「私のかわいい薔薇の木」・「向日葵」・「百合」を壽岳文章氏はそれぞれ、地獄・煉獄・天国に喩えている）は「相反するものを繋ぐもの」としての典型的な作品と言えよう。また、『天国と地獄の結婚』というタイトルの中にある「結婚」はまさに「相反するものを繋ぐもの」に他ならない。この「繋ぐもの」が核となって後期預言書に至り、晩年の作品『新曲』の挿絵へと繋がっていったのだと考えられる。

この発表では、ブレイク思想の中核をなす「相反するものを繋ぐもの」について、文学作品だけではなく、絵画に示された「繋ぐもの」に注目し、特に「ダンテの『神曲』への挿絵」について考察し、ブレイク思想の「煉獄観」について述べたい。

## 【研究発表論題と要旨】（第5会場：320教室）

### 1. 13:00 ~ 13:30

#### 「ケースによる現代社会」実践から見る可能性（ベトナムでの実践より）

雄谷 進（国際交流基金・日本語国際センター 専任講師）

ベトナムは近年大学での日本語学習者が激増し（その一例として、ここ4年間中部フエでは2倍、ホーチミンでは3倍~4倍、ハノイのある私立大学は何と6倍増である）。また国際交流基金が毎年海外で実施している日本語能力試験（以下、JLPTとする）受験者も急増している国の一つである。

このベトナムにおける日本語教育の中心の一つは大学であるが、大学ではカリキュラム等が決まっているため、「現代社会」も既存の教科書で日本全般について学ぶことになる。また年間の授業時間数も限られており、新たに時間数を増やし、より深く学ぶことは現状では難しい。また実際に大学で日本語を教える教師であるがベトナムに限らず、海外の教師は日本へ来る機会が少ない。その結果として学生が関心を持つ現代社会への情報も少ないというのが現状である。

そこで、ベトナムの各大学で足りないと思われる日本の現代社会特別授業を行い、上記の課題を多少とも解消できないかと考えた。これまで2008年から2015年にかけてベトナムのハノイ、ホーチミン、フエ、ダナンなどにおいて日本語を学ぶ大学生対象に「ケースによる現代社会」の特別授業をおこなってきた。ただこの7年にわたる特別授業では、それぞれの地域傾向をつかむことのみであった。

ベトナム全土で日本語を学ぶ学生の傾向を比べてみる必要を感じた。今回ベトナムの3つの地域の5大学と交渉し、上記の課題を解決すべく、ハノイ、フエ、ダナンにおいて特別授業、インタビュー、アンケート調査を実施したものである。実施大学は、ベトナム北部ハノイの国立ハノイ大学、私立タンロン大学、私立フォンドン大学、ベトナム中部にある国立ダナン外国語大学、国立フエ外国語大学である。なお対象は、この5大学の3年生、4年生、大学院生（JLPTのN3, N2レベル相当）である。

「ケースによる現代社会」授業が、日本や日本語への関心を高め、3年生、4年生、大学院段階において「もっと日本語を学ぼう、より深く研究しよう」という新たな動機付けにつながるきっかけになればと考えている。

なお今年度（2016年度において）、「ハノイの貿易大学」で大学の卒業単位の一部として認められる授業として実施予定である。

今後もベトナムで多くの実践を通して、さまざまな海外における国での「ケースによる現代社会」授業実践への可能性をさぐることもねらっている。

2. 13:35 ~ 14:05

朝鮮美術展覧会と表象  
— 作品における「郷土色」表現を中心に —

李 尚珍（山梨英和大学 准教授）

朝鮮美術展覧会（以下、朝鮮美展と称する。）は、一九二二年六月一日、京城府泳楽町の商品陳列館において第一回が開催され、一九四四年六月二二日、第二三回を最終回とするまでに、戦時中の物資等様々な困難があったにもかかわらず毎年開催されてきた。

そこには、植民統治権力の正当化と日本への同化政策を目的として、広く文化・芸術領域への統制及び管理を強化することによる朝鮮民衆の意識改造という狙いがあった。しかし、「朝鮮社会（作家及び民衆）」は、一方で日本の目的を認識していたが、他方で「公平」、「審査の厳密さ」を訴えつつ、朝鮮美典を「社会的・文化的啓蒙の機会」、「芸術力育成の場」、「近代化表象の空間」として捉えていく傾向にあった。

その中、朝鮮人作家と日本人審査員の間には絶えず、「純朝鮮のもの」、「地方色」、「ローカルカラー」、「郷土色」など、作品の表現に関する議論が展開されていた。

1924年に女流作家羅蕙錫が、朝鮮美術界における他者の模倣傾向を憂慮し、彼女が初めて使用したと見られる「郷土色」という言葉に「朝鮮特殊の表現」としての「パワー」を感じていた。そして、その「郷土色」とは、朝鮮人にとっては、その土地（＝朝鮮）に生まれ育った人（＝郷土人）であるからこそ「表現」できるアート（純粋美術）であるというものであった。しかし、日本人にとっては、日本本土の続きにある朝鮮という一地域色にすぎず、「表現」というより、「テクニック」の一つで、かつ、前近代的なイメージと見なされていた。

一方、朝鮮美展の日本人審査員らは「地方色」と「純朝鮮もの」を求めていた。それらは、美術展覧会における「朝鮮特殊の表現力」に関する正当な評価としてではなく、展覧会をも「奨励・保護」の対象としてしか考えていなかったからである。

本研究報告では、1922年から1940年までに発行された『朝鮮美術展覧会図録』と『朝鮮美術展覧会記事資料集』（1999年、美術史論壇第8号別冊附録）の記事を分析しながら、作品における「郷土色」が展覧会においてどのように表現されてきたのかについて考察する。具体的には、まず、「郷土色」を積極的に言及した朝鮮人作家の作品と日本人作家の作品の表現を比較分析する。そして、一九三二年、第一一回朝鮮美展に「工芸部」を新設することで、「郷土色」が強調されるようになったことに着目し、工芸品における「郷土色」表現について考察する。また、一九二四年に「朝鮮民族美術館」を設立し、「工芸ブーム」を巻き起こした柳宗悦と浅川伯教・巧兄弟による活動にも注目し、「郷土色」表現が時代の変化の影響を受けていたのかについても考察する。

## 【研究発表論題と要旨】（第5会場：204教室）

3. 14:10 ~ 14:40

### 20世紀前半における日本人が見た中国人女性の表象 — 「服装」に関する言説を中心に —

劉玲芳（大阪大学大学院 言語文化研究科 博士後期課程）

20世紀の前半、「支那趣味」と呼ばれる流行があり、中国（当時は支那と呼んだ）のさまざまな風俗や文物などに日本人の興味が注がれた。その中には「中国服」に関する記述が少なくない。また、同時期、中国に渡航する日本人も増加し、彼らによって書かれた資料が残っており、その中にも中国人、とりわけ女性の身装文化についての記述がよく見られる。にもかかわらず、こうした資料から当時の中国人女性の身装文化がどのようなものであったのかを分析するような研究はまだなされていない。また、中国趣味が流行った当時の日本人が、文学あるいは美術作品の中で登場した中国人女性も含め、そういった女性たちに一体どのようなイメージをもっていたのかはまだ明らかにされていない。

本発表は、20世紀前半における中国人女性の「服装」に関する言説を中心に、そこに記された中国人女性の服装や髪型などを抽出して分析する。例えば、谷崎潤一郎や芥川龍之介といった小説家たちの作品から「中国服」についての描写を、また当時の『読売新聞』や『婦人公論』などの新聞、雑誌からは一時的に流行服となった「中国服」の記事を分析することにより、当時の日本人が見た中国人女性の身装文化の様相を明らかにする。そして、それぞれの領域における中国人女性のイメージがどのように描かれたのかを考察することにより、20世紀前半における中国人女性の表象が日本で成立した過程を明確にする。

4. 15:00 ~ 15:30

中国の古代文献にみる拍手の起源

秦 睿澤（九州大学大学院 芸術工学府 修士課程）  
矢向 正人（九州大学大学院 芸術工学研究院 教授）

本発表は、拍手の起源について、中国古代文献から検討する。多くの社会現象に流行り廃りがあるのと違って、拍手や手拍子は、人間の文化において安定的な現象であるため、古くから儀礼として、あるいは感情を伴うコミュニケーションの手段として存在していたと考えられている。日本における拍手に関する最古の文献は、『魏志倭人伝』（280年頃）に記述される「見大人所敬但搏手以當跪拜」であり、身分の高い人には、拍手をするだけで、中国の「跪拜」の代わりになるという意味がある。しかし、それ以前の中国の文献に現れた拍手についての研究は、中国にも日本にも存在しない。本発表では、『魏志倭人伝』以前の文献にみる両手を打ち合わせる行為に関する記述を検討する。

まず、中国で両手を打ち合わせる動作が記載されたもっとも古い文献は、『周礼』（紀元前4世紀から紀元前2世紀頃）であり、この中に、「振動」という動作が見られる。「振動」は葬礼の時のもっとも慎重な礼儀であり、跪拜のあとに一回手を打つ。次に、『戦国策・趙策』（紀元前3世紀から紀元8年）の中に「趙王曰 寡人不好兵 郑同因抚手仰天而笑」という文があり、趙王が「私は戦争なんか好きではない」と言うと、郑同が拍手しながら笑い始めたという意味である。拍手は笑いであり、嬉しさを表現するために打たれている。一方、『漢書』（紀元80年）には、「天子闻之惊 拊手曰 曩固疑其不就牢狱 果然杀吾贤傅」という文があり、王はその話を聞いて驚き、拍手しながら「私が賢明な先生を間違って殺してしまった。」と後悔した。拍手は驚きを伴う後悔の表現として打たれている。また、『阮元瑜集』

（165-212）の中に「元瑜最先 遗文鬼名 抚手痛悒」という文があり、元瑜が先に他界し、死者の名簿に載ったことに心を痛めて痛心の拍手をしたという意味を持つ。『阮籍集』（210-263）にも、「公卿大夫拊手嗟叹」という文があり、侍臣が拍手しながら嘆いている。『史记』（紀元前145—紀元前90年）には「君有何疑焉？孟尝君乃拊手而谢之。」という文があり。これであなたはもう疑うことがないでしょうと部下が言うと、孟尝君は拍手しながら部下に感謝した。拍手は感謝を表現するために打たれている。

他方、神話上の生物が拍手する例もある。『楚辞章句』（25年—220年）の中には「螯，大龟也，击手曰拊。」という文があるが、螯とは、大きな亀である。また、『援猴赋』（217年—278年）には、「或低眩而择虱，或抵掌而胡舞」という文がある。人間の訓練を受けた猿は頭を下げてノミを取り、拍手しながら踊るという意味である。

現代では、拍手は儀礼や賞賛の意味で打たれることが多いが、中国古代文献を検討すると、礼儀としての拍手の他に、笑ったり、驚いたり、嘆いたり、感謝したりなど、さまざまな感情を伴う拍手が見られ、動物までも拍手することがある。本発表では、これらの中国の文献から、拍手の起源とその本来のあり方を考察していく。

5. 15:35 ~ 16:05

言語系統と民俗系統

— 19世紀欧州の学問的言説と日本文化 —

横道 誠（京都府立大学 専任講師）

近年の日本では、日本人の特殊さや優秀さを自負する言論あるいは政治的なメッセージ性の強い娯楽が人気を博している。その際、日本人の特殊さや優秀さや、あるいは他国民——多くの場合は周辺の北東アジア諸国の人々——の平板さや劣悪さは、しばしば公平さを欠いた擬似的な学問的説明によって

「論証」されている。もっとも、このような風潮は、日本に特殊とは言えないだろう。たとえば、ドイツはナチズムの経験から、現在は一般的に「寛容な」国という性質を持つが、近年の移民と難民をめぐる報道は、ドイツでもさまざまな「非寛容な」意見が提出されている事実を伝えている。それらの言論においても、民族や人種や宗教の問題は、しばしば擬似的な学問的説明によって「論証」されている。

発表者の現状への関心は、そのような、〈民族や人種に関する擬似的な学問的説明〉にある。しかし、今回の発表では、現状に対して共時的関心をもって向き合うのではなく、現状の背後にある歴史的経緯に対して通時的関心をもって向き合いたい。

小熊英二が論じたように、軍国主義の時代の日本では、「日本人」が複数の言語や文化や民族によって織りなされる存在と考える論調が珍しくなかった。それは、植民地支配という政治的現実と合致したのであった。長山靖生によると、その時代に、「日本人」をアイヌ社会や南洋世界や中国大陸や朝鮮半島と積極的に関係づける作業が、アマチュア的な歴史論や文明論、あるいは虚構の物語においても人気を博したという。対照的にも、この問題系において、敗戦後に主流となったのは、日本が「単一民族」であるという論調である。赤坂憲雄は、岡本太郎が、東北や沖縄の文化的個性への関心を手がかりにして、〈文化複合体としての日本〉を強調しようとしていた事実之光を当て、これを再評価したが、岡本のような芸術家や思想家は、現在にいたるまで少数派でありつづけた。

発表者は、明治時代以降の日本で展開されたこれらの「日本人論」が、いわゆる「列強」によって代表される欧米世界での知的関心を輸入したものと考えている。なによりも、日本でそのような議論が活発になる以前から、欧州ではそのような議論が知識人の間を席卷していたという事実がある。言語や民族を問う問いは、日本が欧米の「列強」へと食い込むなかで、不可避免的に輸入されてきたものではなかっただろうか。

この発表では、特に19世紀欧州の言語系統および民族系統に関する学問的言説に注目し、日本で展開された議論の「背景」あるいは「水脈」への見取り図を得る。レオン・ポリアコフは『アーリア神話』において、この問題を「アーリア人種論」以前と以後に分割して全体像を提示した。発表者は、ポリアコフの議論を批判的に検証しながら、言語学者・神話学者のヤーコプ・グリムの活動に着目し、欧州の学問的関心が、政治と絡まり合いながら、日本にいかなる形で輸入されてきたのかについての説明を試みる。

6. 16:10 ~ 16:40

戦前南洋研究における文化伝播論  
— 松本 信広と山本 達郎の著書に焦点を当てて —

カルロヴァー・ペトラ（早稲田大学 グローバルエデュケーションセンター）

1930年代、日本に南洋研究から東南アジア研究が誕生したときに、文化伝播論という民族学的な理論の影響が特徴的でした。文化伝播論は多元進化論に基づき、諸民族の系統や文化の伝播（文化の影響）を解明する目的がありました。1934年に、ロンドンに行われた第一回人類学民族学国際会議では、文化伝播論的な理念は民族学の基本として導入されました。翌年、ブーン文化伝播論派の主導者であったWilhelm Schmidtは東京で講演をしました。その中に、進化論派の研究方法を批判し、日本の民族学研究が文化伝播論派の研究方法を導入すべきと強く勧めました。その結果で、1935年に設立された日本民族学会は文化伝播論の理念を研究基礎として定義しました。このような発展は南洋研究や東南アジア研究に対してインパクトを与えたと考えられます。カルロヴァー・ペトラ（2015年）は松本信広という東南アジア研究の創始者が文化伝播論を導入したことについて考察しました。しかし、もう一人の東南アジア研究の創始者であった山本達郎について研究が少ないです。それで、本研究は、松本信広と山本達郎の戦前の著書に文化伝播論がどのような影響を与えたのかを明らかにすることを目的とします。

1930年代、日本は南洋諸島の開発を進めるとともに、東南アジアにも注目を始めました。インドシナに関する仏日貿易協定が締結され、日本・仏領インドシナの直行便が開始されました。このように東南アジアへの経済的な進出が始まった一方、東南アジアに関する情報が不足していました。そこで、慶應義塾大学の教授であった松本信広（1897 - 1981）は1933年にインドシナに資料収集調査を行った後、ベトナムを中心に東南アジアについて多くの著書を発表しました。同じく、東方文化学院研究所助手であった山本達郎（1910 - 2001）は1936年に仏領インドシナ、タイ、マライ連邦などに出張をし、東南アジアに関して論文を執筆しました。

それらの松本と山本の著書を分析した結果、両氏に文化伝播論に影響があったということが分かりました。しかし、その影響の質に違いがありました。松本が南洋の原始文化に対する日本の原始文化の影響を主張したことに對して、山本は中国・インド・イスラムの高度文化が東南アジアの原始文化に影響を与えたと結論付けました。それに、進化論派と社会学派の民族学の研修を受けた松本の著書には文化論派が仮説のようなもので、あまり分析がありませんでした。それに対して、松本より13年若かった山本は、文化伝播論の研究方法を徹底的に適用し、東南アジア文化の本来要素と輸入された外来要素を識別できました。

## 【研究発表論題と要旨】（第6会場：218教室）

1. 13:00 ~ 13:30

### 韓国における藤村研究

林盛奎（白石大 教授）

論者は2005年『21世紀日本文学研究』で「韓国で藤村文学の研究成果と課題照明」という論文を通じて、韓国で島崎藤村の研究成果を証明してみた。

韓国で藤村の作品が紹介されて読まれ始めたのは1970年頃と推定される。1970年代から90年代初期までは『破戒』を中心とした自然主義文学としての紹介から出発したことを知ることができる。90年代以降、『藤村詩集』『春』『家』などこのテキストで読まれ、翻訳本で出版される。単行本の出版は、1992年盧英姫の『父とは何か』をはじめ、研究書として大学の講義で読まれたものが大半を占めている。韓国で日本文学研究は日本語教育の一環として行われたのは事実である。大学での日本語教育は日本文学研究よりは日本語を手段として社会のニーズに応えることが目的であった。したがって、日本文学は日本語教育の教材として相当な進展はあったが、純粋な日本文学の研究自体は歴史がそれほど長いとは言えない。その後10年が経った2015年の時点で、藤村の研究成果を調査して、どのような方式で藤村研究が行われ、どんな問題点が現れているか、データを通じて評価しようとするのが、この発表の目的である。データは1990年以降の藤村研究の成果を対象に評価し、主に単行本の翻訳本や学術論文や学位論文などを対象にした。李漢燮の『韓国日本文学関係研究文献一覧』は韓国人の研究者たちと韓国の日本人研究者などの日本研究の文献目録を整理編集している。彼は続けて、韓国日本語日本文学研究文献の検索というデータベースを構築して現在に至っている。文献の収録対象は単行本と学術論文が主として、発表の地域は原則的に韓国で発表したものを対象として、韓国人が日本で発表したものも対象に含まれており、日本人が韓国の大学や学会誌で発表したものも記述された。また、論者は、1990年1月から2015年12月以前の七つ(登録候補の学会誌以上)の学会誌に発表された藤村の論文本数を調査した。日本学報、日語日文学研究、韓国日本語文学会、日本語文学、日本文化学報、日語日文学、東アジア日本学会(日本文化研究)である。以上のようなデータを参考として藤村の著書や訳書の刊行の事情、学術論文の学位論文を中心とした研究の現況及び成果、その問題点や課題について証明しようと思う。

2. 13:35 ~ 14:05

韓国高齢者労働力活用の現状と問題  
— 老人社会活動支援事業を中心に —

朴基勲（ソウルサイバー大学 社会福祉学部）

1. 研究目的

本研究の目的は（社会的）退職後の高齢者労働力の活用方法を模索するために、韓国の（所謂）生きがい労働を事例として分析し、政策的に示唆する点を提示するところにある。そのため、まず、高齢者の労働力の特性を明らかにした上で、老人社会活動支援事業の労働形態を日本の生きがい就労を参考にしながら分析する。次に、老人社会活動支援事業が高齢者労働力の活用においてどのような問題に直面しているかを分析する。最後に、高齢者の労働力が仕事を通じて活用する方向性を提示する。

2. 問題提起

高齢者の労働力を社会的に活用することは社会保障の持続可能性という側面だけでなく活力あふれる社会を作るという面からも大いに必要である。ただ、高齢者の労働力は仕事を通じて活用することはかなり難しい。それは、高齢者の（働く）能力が多様であるだけでなく、高齢者の働く理由も多様であるからである。韓国では2004年から老人社会活動支援事業（旧、老人仕事事業）が実施された。老人社会活動支援事業は、参加する高齢者（老人）に所得捕捉や健康維持、社会貢献など所謂生きがい就労の機会を提供する政府の補助事業である。老人社会活動支援事業は2004年35,127の仕事を高齢者に提供し始めてからわずか10年でその数は261,698個に増えた。提供する仕事の数が増えるにつれて支援予算も2004年292億ウォンから2013年には4,670億ウォンに増加した。しかし、最近韓国の老人社会活動支援事業は問題に直面している。それは、この事業に参加する高齢者を労働者として認めるべきか、あるいは認めるべきでないかという問題である。老人社会活動支援事業は福祉政策的な側面を持って出発したが、この事業に参加する高齢者が労働市場の中で競争しなければならない仕事を一定時間することから生じられた問題である。そのため、所得を求める高齢者を事業の中心にすべきか、あるいは仕事の楽しさ、健康維持、社会貢献など福祉的な目的を持つ高齢者を事業の中心にすべきかの選択をしなければならないと意見まで出ている。このような問題をどのように対処していくかは今後の高齢者の労働力活用の上で重要である。日本の場合、すでにシルバー人材センターで生きがい就労という概念を提供してきた。日本の生きがい就労という労働形態はシルバー人材センターで見られるようにいろいろな課題も抱えている。本研究ではその点も含めて、高齢者の生きがい就労の必要性及び課題を韓国の社会活動支援事業を事例として考察する。

3. 先行研究及び研究方法

韓国の老人社会参加支援事業は事業の規模が大きくなるにつれて、多くの研究が現れたが、高齢者労働力活用のために必要な高齢者の労働形態に関する議論はほとんどない。最近になって高齢者の勤労者性（労働者としての性格）の議論から、高齢者に適した労働の仕方という点を考え始めた程度である。本研究は主に韓国と日本の著作、論文、政府報告書、ホームページの資料等を中心に文献分析をする。

4. 結論

高齢者労働力の活用のためには労働（所得）と福祉（生きがい）を同時に求める必要が引き続きあるが、その提供の仕方はさらに議論を詰めていく必要がある。

3. 14:10 ~ 14:40

在日朝鮮人文学における朝鮮語文学の様相  
— 総連と民団の機関紙を通して —\*

呉恩英（愛知淑徳大学 常勤講師）

在日朝鮮人作家の多く（金達寿、金石範、李恢成など）は、総連系の朝鮮学校の教員や、新聞社、雑誌社などに携わっていたが、1960年代後半には多くの作家が組織から離れていた。その後、彼らは次々作品を発表し、日本文壇から注目され、これに関する研究も進められている。最近、『ヂンダレ』（1953～1958）、『カリオン』（1959～1963）、『季刊三千里』（1975～1987）等、日本語に書かれたものだけではなく、朝鮮語で書かれた『文学芸術』（1960～1999）など、在日朝鮮人文学の研究が幅広い分野にわたって行われており、作家や作品の発掘作業もなされている状況である（ハンスノク外『在日同胞の韓国語文学における民族文学的性格研究』、宋恵媛『「在日朝鮮人文学史」のために』等）。ところが、単行本や雑誌よりもっと身近に接することができたと思われる、在日朝鮮人が発行した新聞はほとんど取り扱われていない。新聞の場合は、在日朝鮮人に関する様々な情報が載せられているので、まだ知られていない作家や作品を発掘することができ、在日朝鮮人文学の研究における色々な疑問が解け、また在日朝鮮人文学の全体像もより明確になる重要な資料だと考えられる。

今までの先行研究には主に民族主義、アイデンティティー、そして言葉の葛藤などについて論じられてきた。これは言うまでもなく、朝鮮が日本に植民地化されたことから生じる様々な問題が作品に多く現れているためであろう。ところが、ここで多くの研究者たちが見逃しているのは、在日朝鮮人社会の中での問題ではないかと思う。というのは、ただ植民地期の経験や朝鮮人だから、民族性を保つべきだということだけではなく、組織の分裂や争いの中、朝連（総連）側からの民族意識や民族教育（朝鮮語及び歴史など）の強要があったからだと思う。そのため、民族性やアイデンティティーがより強く揺れるようになったと考えられる。その背景をより明確にうかがえるのが、総連系と民団系の機関紙だと考える。特に、朝連（総連）系の新聞『解放新聞』には、ほとんど毎回到小説が連載されており、詩、随筆、演劇、映画、評論などあらゆる分野に積極的に取り組んでいたことが分かる。また当時在日朝鮮人と日本共産党との関係もうかがえる。その反面、民団系の新聞『民主新聞』には、朝連系に比べると、詩や小説の連載などが紙面を占める割合が非常に少ない。その原因も探らなければならないだろう。

本発表は、在日朝鮮人文学の全体像を捉え直すことを試みる一段階として、まず1952年度後半から1953年度の朝連系の『解放新聞』を中心に朝鮮語で書かれた作品とその内容を紹介しようとする。これに載せられている作品には、朝鮮戦争や民団との争い、また朝連内での分裂の様子もうかがえるが、これに関連する注目すべき記事を加えながら作品を考察していきたい。

---

\*本研究はJSPS 科研費 15K45678 の助成を受けたものです。

4. 15:00 ~ 15:30

遠藤周作の作品にあらわれる韓国人観

松橋 幸代（忠南大学 日語日文学科 招聘教授）

遠藤周作（1923 ~ 1996）は日本のカトリック作家としての顔だけではなく、「狐狼庵先生」というもう一つの独特なキャラクターをうみだし、親しみのある国民作家としても人気を博したある意味特異な作家である。遠藤の作品のジャンルも多様であるのと同時に、実にさまざまな登場人物が描かれているのも大きな特徴であるといえるだろう。今回は、遠藤の作品の中でもその文学性の高さから、単なる大衆文学とは片付けられない『わたしが・棄てた・女』を取り上げてみたい。この物語の主人公は、ハンセン病と誤診されたミツという少女の生き方を通して、遠藤「同伴者イエス」として描かれている。『わたしが・棄てた・女』は「ぼくの手記」と「手の首のアザ」の章が交錯しながら構成されている。「ぼくの手記」の書き手である吉岡という青年は、ミツが愛した大学生の青年である。戦後の貧しい時代を生きる若者の一人であったが、彼が紹介されたアルバイト先で出会ったのが「金さん」である。この金さんの描写には次のようなものがある。

どうやら、このオカッパ頭は、戦後、東京に進出してきた外国人らしい。

オカッパ頭は鼻の穴に指を入れて中をかきまわしながら

大きな金色の指輪をはめた指で、

こちらを丸めるつもりか、それとも憐れなバイト学生に仏心を起したのか、金さんは原色のズボンのポケットからラッキー・ストライクを出してくれた。

時々、唾がこちらにかかるのは迷惑だが、傾聴に値するものもないではない。

金さんは乏しい彼の日本語で、女にはまず強い印象を与えるのが大切だと言う。気が弱くて、ひっ込み思案だと、兎角若い女に気に入られるために上品ぶったり、気どってみせるものだが、あれでは若い娘の心に印象を残さない。戦後の若い娘は強烈な、個性ある男に心ひかれるのだというのだ。

金さんの故国では食物だって強烈だ。肉にヒリヒリする唐辛子をかけてたべる。漬物だって唐辛子をふんだんにかける。日本人のように薄味を好む国民には、このやりかたは適しない。

このように金さんの描写を通して、遠藤の韓国人観が垣間見える。それは、戦後日本に渡ってきた朝鮮半島の人々の強い生き方、そして多少ずるさはあるものの、人情あふれる人柄を描いている。遠藤は、1988年に国際ペンクラブのソウル大会に日本ペンクラブ会長として出席したこともあり、その時の様子は「五日間の韓国旅行」にも書かれてある。そして1968年には「ユリアとよぶ女」が書かれたが、朝鮮貴族の娘がモデルになった人物も登場する。遠藤は韓国や韓国人に対して関心を抱き、作品に登場させているといえる。

5. 15:35 ~ 16:05

“独島 = 竹島問題” から見る日本文化の特質に関する検討

崔長根（韓国大邱大学校 日本語日文学科 教授）

韓国と日本の間に独島の領土で領有権を争っている。独島問題は韓日両国の発展とさらに東アジアの発展にも多くの障害をもたらして政治、経済、社会の分野に与える影響が非常に大きかった。独島領土問題はどのような形であれ、必ず解決しなければならない課題である。

- (1) 地理的に日本と独島との関係性：過去と現在にも、韓国と日本における地理的に独島との距離は変わらない。地理的に独島に最も近い韓国の領土である鬱陵島からは、独島が見える。しかし、日本の領土である隠岐島からは、独島が見えない。「見える」というのは、主に領有権が発生する要因になる。したがって独島は韓国の領土である鬱陵島から見られるので、1次的に韓国側が独島に対して領土意識を持つようになった。一方、日本側が韓国より先に領土意識が生じることがなかった。
- (2) 歴史的に日本側の独島領有権：記録上には、古代時代に鬱陵島に韓国人が住んでいた。韓国側は高麗時代から鬱陵島から見えるところに韓国の領土として独島があると認識し始めた。一方、日本は、1620年代から韓国の領土である鬱陵島にこっそり入って経済的収奪を開始し、渡航の過程で初めて、鬱陵島とともに独島の存在を知った。幕府は17世紀紛争の時、鬱陵島が日本の領土でないことを認めた。明治時代になっても、大陸侵略の一環として鬱陵島と独島を調査したときにも鬱陵島とともに独島が韓国の領土であることを認めた。歴史的に見ると、日本が領土拡張の野心を持っていたにもかかわらず、独島に対して日本の領土であるという認識は全くなく、韓国の領土であることを認めた。
- (3) 政治史的に見て、日本の独島領土政策：日本は大陸の領土を確保するために、日清戦争と日露戦争を起こした。特に日露戦争の時に独島は所有者が存在しない島という名目を作って日本の領土に編入した。実は朝鮮の領土だと知っていたにもかかわらず、編入措置をとったのは、領土侵略行為である。
- (4) 日本の敗戦と連合国の独島領土的地位の規定：日本が敗戦して、連合国は、連合軍最高司令部の命令書（SCAPIN 677号）に基づき、対日平和条約で日本の領土を処理したさいに、独島を韓国領土と処理した。その過程で、日本は独島を日本領土に規定するように、連合国の中心国家であった米国を動かそうとしたが、日本の意図は達成されなかった。
- (5) 戦後日本の独島に対する立場と領有権主張：戦後日本は韓国の領土である独島に対して領有権の主張を放棄しなかった。これは、新生独立国家であった韓国を無視した結果で、日本が他国の領土に対する侵略性を完全に捨てなかったことを意味する。
- (6) 独島に対する日本の立場から見る日本文化の特質：独島は地理的にも歴史的に見ても、韓国の領土であることは明らかである。ところが、日本は政治的プロセスのなかで独島を侵奪しようとする努力は続けられた。日本のこのような態度は、戦前の領土ナショナリズムを完全に清算していなかったからである。ナショナリズムの清算は、教育によって行われる。日本の教育が過去のナショナリズム形にとどまっていること、そのものが日本の文化である。すなわち、日本文化は、領土ナショナリズムの要素を持っているといえる。
- (7) 独島問題を解決するための方向性：独島問題の解決は、日本が領土ナショナリズムを清算することによってのみ可能である。それは、学校教育を通じて可能でそれが社会的にも影響を及ぼし領有権を放棄することになると、通常の日韓関係を回復しながら解決される。

6. 16:10 ~ 16:40

近代朝鮮の「新女性」認識に関する談論

李京珪（韓国東義大学 教授）

李杏花（韓国慶星大学 講師）

朝鮮は、開港初期を除いては日韓併合以後、日本を通じて西欧文化に接触でき、特に30年代後半、内鮮一体の名分を揚げていた時期には絶対的な影響を受けたとも言える。日本の場合、近世以前、西欧文物に関して積極的に受け入れていた経験があり、たとえ意図していなくとも、開港により西欧文明を受け入れ、東アジアで一番先に近代化を遂げた。日韓併合以降、朝鮮は、西欧文化との直接的な接触より、日本帝国を通しての文化交流が行われるようになり、日本化された西欧文化、日本式制度が導入された。

特に、日本に留学した朝鮮の女性たちは帰国後、恋愛結婚やファッションに至るまで新しい文化の先導者の役割を担い、20、30年代『新女性』『新女子』などの雑誌で紹介された。彼女らは、最初、朝鮮の服を着て日本へ渡ったが、学校が長期休暇に入ると、洋服に短髪で帰郷し、家族を驚かせるといったことが少なくなかった。留学生たちから感じられる新しいものと異質的なものは、反感であれ好奇心や好意であれ、新しい日本の近代文化を近くで感じさせ、どんな形であれ影響を受けざるを得なかった。

都市を中心とした消費文化の定着と拡散に主導的な役割を果たしたのは、一般的に女性であった。特に、日本と朝鮮は近代消費文化が、ほとんど西欧で始まったため、伝統と近代との対立や葛藤を引き起こした。制限された少数ではあるが、女性たちは社会に進出し、仕事をするようになり、新女性に包括される社会層の範囲が相対的に広まったことが、消費文化の拡散に貢献した。1920年から1930年にかけて、西欧式近代大衆文化が創出され始め、都市の消費文化を形成していった。朝鮮全体ではなく、当時の首都・京城を中心とした近代消費文化ではあったが、その過程で議論になった消費の主体は新女性と呼ばれる新たな若い世代であった。

本発表では、当時の消費文化や女性解放論などの拡散に主導的な役割を果たした新女性に関連して、次の事項を中心に分析していく。

まず、近代朝鮮における「新女性」とは、「近代的教育を受けた女性」の意味であるが、このような含意を持っている実践的レベルの表現には「新女性」のほか、「モダンガール」「現代女子」「職業婦人」「職業女性」などがある。言語的脈絡を越え、言語使用者の性別、社会制度、都市化、談論構造などの脈絡の中で、これらの新女性関連語の使用様相を把握していく。

また、特定の身体表象と関連して、新女性認識に関する談論はどのように創出され、どのように伝播されていくのかなど、その変遷過程を分析していく。

## 【研究発表論題と要旨】（第7会場：204教室）

1. 13:00 ~ 13:30

### 産業・文化・学びのコラボレーション — 他分野連携プロジェクトによる伝統文化への貢献 —

関口 英里（同志社女子大学 学芸学部 情報メディア学科 教授）

京都伝統文化の盛り上げに主眼を置いた、大学授業における産学連携ブライダルプロデュース企画の昨年度実践事例を紹介する。伝統産業、婚礼業界、大学のコラボレーションで、多層的な文化のベネフィットを生み出した活動の意義を提示したい。

京都は歴史と伝統文化および地域ブランド力において圧倒的な存在である。一方、習俗や経済状況の時流変化に伴う需要と消費の減少、固有技術を有する職人と継承者の不足等から、維持継続が困難な伝統産業が増えているのも事実である。真の文化振興のためには、伝統産業をめぐる深刻な状況を打開する有効な対策が必要である。発表者のゼミでは、婚礼文化の側面からその課題解決に着手し、実践的な産学連携プロジェクトを8年間継続している。本企画の独自性は、婚礼分野単独ではなく、異分野の伝統文化アイテムを演出の主題に取り入れ、毎年その対象を変えることで、複合的かつ広範に京の伝統文化を活性化する点にある。昨年度は京野菜に着目した演出企画の開発を試み、業界大手の老舗企業との連携が実現した。従来は披露宴料理の食材としてしか利用されてこなかった京野菜をあえて食さず、斬新なエンターテインメント演出に応用することで、京野菜の新たな可能性と魅力発信を提案し、前例のない婚礼企画を提案した点が大きなポイントとなっている。

企画にあたっては、京都の伝統文化、婚礼儀式、さらにはプランの演出に取り入れる主題事象への深い理解と調査といった文化研究を前提としながら、最終的には実際に連携企業で販売される婚礼プランとしての商品価値とその効果的PRも必要とされる。ゼミでは常に京都文化の活性化に貢献する方策とは何かを探り、伝統文化の意味、その掘り起こしに必要な仕掛け、さらに伝統的な商材を利用した産業と文化のベネフィット創出策という課題に取り組んでいる。京野菜を取り上げた昨年度の活動では、京野菜についての歴史文化的な知識修得、他地域や一般流通品との比較考察と独自性の分析、文化的啓蒙と普及にむけた楽しさの演出と効果的なメッセージの発信方法に工夫を凝らした。京野菜の本質を維持する一方で現代のニーズに合わせてアレンジし、固有の伝統文化と特性を最大限に引き出すことで、現代の披露宴に応用可能なオリジナル演出を完成させ、公式発表を行った。

文化の本質は、時代に応じて変化しつつ継承される柔軟性にあるといえる。「伝統」が実は緻密な操作により新たに生成される戦略的な側面を持つことも文化研究の側面から指摘されている。文化理解の本質に触れる発見と学びを実践的な活動の中で体験し、そこで習得した知見を商品やサービスという形にできたという点も、大きな成果であったといえる。

本プロジェクトは、伝統を不断の創造活動で更新される「文化の仕掛け」として捉えることの重要性を提示するとともに、京都の伝統産業、婚礼ビジネス、大学の学究活動の各者にとってベネフィットを生み出す、ユニークな文化的コラボレーションであると考えている。

2. 13:35 ~ 14:05

日本の「あし文化」の多角的研究  
— 日本人と「はきもの」の着脱2 —

栗山 縁（福岡大学 スポーツ科学部）

日本人の「はきもの」の着脱の行為については、脱いだ後始末に気を配ったり、「草履取」といった役職が存在したりと幾多もの文化的独自性がみられることを先行研究で論考した。そこでさらなる追究として、内（ウチ）における「はきもの」の着脱について考察する。

日本では「はきもの」を脱いで玄関などから内に入ると、必ず次の「はきもの」であるスリッパが用意されるが、その履き替えたスリッパは昼の部屋では脱ぎ、トイレではトイレ用のスリッパ（トイレ履き）に履き替えるといったように、外の汚れを内に入れないうちに「はきもの」を脱いだにも関わらず、内においても何度も「はきもの」を履き替えている。

歴史的にみると、日本人の内履き着用はかなり古くから行われていることが絵巻物（『慕帰絵詞』1351年）から確認でき、トイレ履きについては日本の厠の歴史から特有の「はきもの」を着用していたこととの関連が考えられ、日本人が内履きを着用する第一の要因は、日本の伝統的な家屋建築をあげることができる。しかし、現代日本の家屋の建築様式が一変した環境においても内履きを着用し、さらには玄関の框のように一段上層にある内でなくとも、職場では職場用の「はきもの」、ホテルでは室内用のスリッパなど、「一空間に<sup>いち</sup>一<sup>いち</sup>はきもの」というような法則性すら感じさせられるほど、「はきもの」の着脱を頻繁に行っているのである。

内履き着用に関する現代日本人の意識調査（1995）によると、スリッパを履く理由の第一は「足の保温」で、二位は「足が汚れるのを防ぐため」、三位は「なんとなく履くのが当然と思うから」で回答者の3分の1近くを占めており、トイレ履きを履く理由については「ただなんとなく」が一位であった。また、住生活と「はきもの」を脱ぐことに関する調査（1977）では、室内で「はきもの」を脱ぐ行為が長く続けられてきた理由の半数以上が「解放感・安らぎとの関連度」と「家庭内外のけじめとの関連度」であった。すなわち、現代日本人にとって上履き着用は、人体としての防御本能を感じながらも、「なんとなく」といった感覚で行っている人が多いことを示していた。

以上のことから、日本人の内履き着用の歴史は長く、住宅環境が一変した現代まで継承されまた習慣化されている。そしてこの習慣化は、昭和頃までの日本人が身投げの際に「はきもの」を脱いでいたことや現代の「一空間に<sup>いち</sup>一<sup>いち</sup>はきもの」といった特異性が認められ、日本人の「はきもの」の着脱行為が「あし文化」のなかでも重要な一事象であることを示唆しているといえる。

3. 14:10 ~ 14:40

母親の子育て環境と気分状態との関連

吉田 亜矢（東京純心大学 講師）

問題と目的

育児不安や育児ストレスを抱える親が増加している（山口,2002）現代において、子育てをストレスと感じ、そうした状況に対して対処できないなどと認知をした時に、母親の精神的健康の悪化が起こる可能性が指摘されている（中村ら,2013）。母親が子育てに関する課題や問題を一人で抱え込まず相談できることは子育てによるストレスの軽減になるであろう。本研究は、母親の子育て環境として母親をサポートする相談相手に焦点を当て母親自身の気分状態と子育てに関する相談相手との関連について検討することを目的とする。

方法

調査対象者：A 県内の二つの私立幼稚園の園児『年少児 58 名（男児 32 名、女児 26 名）・年中児 66 名（男児 38 名、女児 28 名）・年長児 61 名（男児 31 名、女児 30 名）』の母親 184 名。

有効回答数：165 名（89.7%）

倫理的配慮

高崎健康福祉大学疫学研究倫理委員会にて、平成 24 年 7 月 13 日付で承認を得て行われた（高崎健康大倫第 2410 号）。研究依頼書には倫理的配慮に関する事項を記載した。

調査期間

2012 年 9 月～11 月

調査内容

1) フェイスシート

母親：基本属性（年齢、子どもの年齢、健康状態、就労状態、子育ての相談相手の有無、子育ての相談相手）

2) POMS 短縮版

POMS 短縮版は、緊張－不安（Tension-Anxiety）、抑うつ－落込み（Depression-Dejection）、怒り－敵意（Anger-Hostility）、活気（Vigor）、疲労（Fatigue）、混乱（Confusion）の 6 つの気分尺度を同時に評価することが可能である。6 つの気分状態の各 5 項目、計 30 項目、5 件法で回答を求めた。POMS は通常気分を測定するために用いられる。本研究では、病理を発見することを目的としていないため、精神的健康の尺度として、信頼性係数が高く、気分状態が測定できることから POMS 短縮版を用いることにした。

手続き

調査は、自記式質問紙調査に準じて行った。調査紙配布の際に、筆者が研究の趣旨を文書と口頭にて説明し、同意が得られた対象者に調査票および厳封用封筒を配布し回収した。

結果

調査対象である母親の平均年齢は 36.2 歳、子どもの平均年齢は 4.02 歳であった。母親の気分状態である POMS 短縮版の各得点の結果は、緊張－不安は 5.19、抑うつ－落込みは 2.81、怒り－敵意は 5.74、活気は 7.45、疲労は 6.58、混乱は 5.57 であった。母親の子育てに関する相談相手の有無は、有が 164 名（99.4%）、無が 1 名（0.6%）であった。母親にとって子育てに関する気軽な相談相手、困難時の相談相手、情報源についてそれぞれを複数回答で求めた結果、母親にとっての気軽、困難時ともに相談相手として最も多かったのは夫（気軽：90.3%、困難時：89.2%）であり、情報源としては友人（78.4%）と回答した母親が最も多かった。母親の相談相手と気分状態との関連について検定を行った結果、夫を気軽な相談相手としている母親の混乱の得点や実両親、実兄弟を気軽な相談相手としている母親の怒り－敵意の得点、義両親を情報源としている母親の緊張－不安、抑うつ、疲労の得点は低かった。一方、困難時に専門機関に相談する母親の怒り－敵意の得点が高く、医師に相談している母親の疲労の得点は高かった。

考察

本研究の結果、夫や実両親、実兄弟を気軽な相談相手としている母親および義両親を情報源としている母親の気分状態は安定し、困難時に専門機関や医師に相談すると回答した母親の気分状態は不安定であることが示唆された。本調査対象の母親は子育てに関して気軽かつ困難時にも夫に最も相談していたことから、夫婦関係が良好であり母親にとって夫が子育ての協力者であると考えられる。相談するという行為は、相手を信頼しているという表れであり、母親にとってそういった相談相手の存在は子育てストレスの軽減につながると考えられる。今後、更なる検討を重ねたい。

4. 15:00 ~ 15:30

企業が取り組む多文化共生  
— ダイバーシティ・マネジメントの新しい幕開け —

郭 潔蓉（東京未来大学 モチベーション行動科学部 教授）

従来、企業が推進する「ダイバーシティ・マネジメント」は、主に女性や民族的マイノリティ、障害者、LGBTといった社会的弱者に対して公平な人事を行うことや均等な就労機会を与えることであった。しかし、近年になって「異文化との共存」や「多文化共生」という新たな概念が加わるようになった。特に最近では、幅広く性質の異なる者が共生共存し、その「多様性」の優位性を活かすという意味での「多文化共生」の意味合いが強めるようになってきている。つまり、前述の社会的弱者だけでなく、社会における個人や集団の間に存在する様々な違いを尊重し合い、受け入れ、そして多様性を活かすことでメリットを見出すことを意識し始めたのである。

こうした企業の動きの背景には「グローバル化」の影響があることは言うまでもない。経済産業省が毎年行っている日本企業の海外事業活動に関する調査「海外事業活動基本調査」によると、日本企業の海外における現地法人の企業数は年を追う毎に増加する傾向にある。実際の数字をみると、冷戦終結期（1989年度）の日本企業の海外での現地法人企業数は、わずか6,362社であったが、2013年度現在では約3.8倍の23,927社に増加しているのである。こうした企業活動の動向の変移により、異文化における経営、特に人材マネジメントの在り方に注目が集まるようになってきている。一方、日本国内においても、多くの企業が将来的な海外進出を見据え、多彩な人材の採用を積極的に行いはじめている。特に近年の留学生による日本企業への就業希望が増えており、留学生の採用許可数を見ると、2014年現在12,958名と過去最多を記録している。

このような動きに伴い、企業における「ダイバーシティ・マネジメント」は、組織の「多様性」の優位性を活かす方向性へと方向展開しはじめている。よって、本研究では、企業における「多様性」の捉え方の変遷から異文化理解と多文化共生への取り組みを調査し、戦略的CSRとしての「ダイバーシティ・マネジメント」を企業がどのように実践しているのかを研究し、その実態を明らかにすることを目的とする。また、組織において、多様性を活かすことによるメリットは何なのか、企業の組織文化にどのような影響を与えるのかを視野に入れ、幾つかの実例をもとに企業組織における多文化化の現状とその背後に潜む課題を提示するものとする。

以上のことを踏まえ、本研究発表が今後の「ダイバーシティ・マネジメント」研究の新たな展望を示すことを目指したい。

5. 15:35 ~ 16:05

日本の学校応援団に関する一考察

金塚 基（東京未来大学 専任講師）

日本におけるスポーツ観戦の機会は、プロ野球やサッカーのJリーグなど運動を職業とする選手の活躍する試合の現場およびそれらを放映するテレビやマスコミなどを通じたメジャーなもののみではない。

応援活動を伴うようなスポーツ観戦の機会は、個人の生涯を通じてみても、オリンピックや各種国際大会などの大きなものから、地域のスポーツクラブの大会や学校の運動会にいたるまで、自分が参加するものであったり、子どもが参加するものであったり多様な関わりがある。

そのような機会の場で発生するであろう応援活動は、個人において一般的なものであるといえる。ここで、そうした応援活動のもつ意味についてまとめられた代表的な研究である高橋（2011年）では、「儀礼」の観点から応援を論じた諸先行研究を基軸として、スタジアムにおける集会的な応援行動を論じている。そこでは、応援行動には単なるエンターテインメントを超えて一体感の高揚から社会秩序や社会的価値を浸透・再生産させる効用をも背後に含んでいることを前提としている。

以上のことを踏まえて、学校における生徒（学生）の応援行動としての意味を考えてみた場合、学校の運動部の試合を観戦して所属の運動部を応援することは、学校集団との一体感を著しく高め、当該学校の文化的価値や規範などを再生産あるいは創造していくような効果をもつ機会として考えることができる（儀礼的效果）。

本報告では、学校応援団の組織・活動について、部活動の教育課程上のカリキュラムにおける変遷、位置づけを確認しながら、その教育的な意味・目的に関して考察したい。とりわけ、旧制高等学校から戦後の大学、新制高等学校における応援団の歴史的経緯・役割について、活動内容ならびに組織・制度的な特徴に関する考察を深めるきっかけを意図するものとした。

6. 16:10 ~ 16:40

中国における日本サブカルチャー  
— 「癒し系アニメ」を例として —

田口 哲也（同志社大学）

李心媛（同志社大学）

日本を代表するサブカルチャーのひとつであるアニメは日本国内だけではなく、中国やアメリカなどの海外でも注目されている。今では国内外で流行している日本のアニメの歴史は一般に思われているほど古くない。日本で初めてアニメ作品が製作されたのは、1917年のことである。それは、J・スチュアート・ブラックトンが、アメリカで世界初のアニメ作品を完成させてから11年後のことであった。洋画の素養があった下川凹天、幸内純一、北山清太郎の3人が、独自に海外のアニメ作品を分析して技法を考え、あいついで作品を製作し、公開したのである。そのあと、今でもヒット作品といえる『鉄腕アトム』は1963年に放映されている。『鉄腕アトム』は当時のテレビアニメの先駆者であるだけでなく、海外マーケットで放映権を持ったという点でも先駆者である。

1990年代末までは、体制的な要因もあり、中国のアニメ市場において長らく海外アニメとりわけ日本のアニメが主導的な地位を占めていた時期がある。『鉄腕アトム』もその中の一つである。1980年代から1989年までの間に、『鉄腕アトム』、『トムとジェリー』をはじめ、日本、フランス、ドイツ、アメリカなどから多くのアニメ作品が輸入された。1990年から1999年までの時期は、主として日本のアニメ作品が輸入された。だが、2000年から今日まで、中国政府は海外アニメの輸入と放送を意識的に制限し始めた。にもかかわらず、中国の若者の間では、海外アニメ、特に日本のアニメの人気は続いている。海賊版DVDやインターネットなどの方式で海外のアニメが視聴されている。

日本のアニメを通じて、日本の若者文化も中国の若者に影響を与えている。たとえば、アニメ文化に関する「お宅」、「萌」などのことばは中国の若者たちの日常会話で普通に使われている。近年、中国では、『夏目友人帳』などのアニメ作品が新しいジャンルとして「癒し系アニメ」と呼ばれ始めた。

学術文献やネットを使った調査から、日本では、「癒し系アニメ」の認知度が低いことがわかった。さらに、アンケート調査を行った結果から、次の四点が分かった。(1) 日本のアニメは中国の若者の間で人気がある。(2) 中国の若者はほとんどネットでアニメを見ている。(3) 「癒し系アニメ」ということばは中国の若者の間では認知度が高い。(4) 中国の若者が「癒し系アニメ」に最もひきつけられる要因はその物語である。

中国のアニメと比べると、日本のアニメは多種多様な題材を使っている。本発表では、人気が高い「癒し系アニメ」にはどのような特徴があるか、また、異なった文化で育った若者になぜ受け入れられるのかを考えてみたい。

## 【研究発表論題と要旨】（第8会場：115教室）

1. 13:00 ~ 13:30

### 万葉集の三種類の英語訳の比較・考察

林 裕二（西南女学院大学 教授）

万葉集とは、4,500首以上の和歌を集める20巻からなる日本最古の和歌集である。奈良時代の歌集であり、759年の歌を最後にそれまでの約400年間にわたる歌が収められている。

本発表では、日本最初の和歌集「万葉集」の三種類の英訳を比較・考察することを目的とする。

三種類とは、先ずは1940年に出版された日本学術振興会の“The Manyoshu One Thousand Poems”（岩波書店）、次にIan Hideo Levyによる“1981年訳—The Ten Thousand Leaves”、最後に神田外語大学の“1991年訳-The Man’yo-shu : a complete English translation in 5-7 rhythm”である。

日本学術振興会訳は、万葉集の4,500以上の和歌から、千首を選んで、英訳したものである。Hideo Levy訳は、巻5の最後の906番の和歌までの全訳であり、Volume Oneとされている。神田外語大学訳は文字通り全訳である。

日本学術振興会訳では、英語訳出版のために4,500以上から千首を選ぶ三つの基準が、次のように示されている。1. 詩として優れていること、2. 日本人の国民性と特性を示していること、3. 文化的・歴史的意義があること（Preface VII）。

Hideo Levy訳は、巻5までに限定しているが、そこまでの全訳であり、神田外語大学訳は文字通り、20巻の全訳である。全訳的な方針の後の時代の二者に対して、日本学術振興会訳は、全体から四分の一弱を選んだものである。

日本学術振興会の三つの基準により選ばれた和歌の翻訳が、それぞれおよそ40年後、50年後の全訳的な他の二つの版とどのような相違を見せるのかを主に考察する。

なお本学会では、英訳万葉集についての最初の発表は、2014年3月の本学会九州支部で日本学術振興会訳について行った。続いて同年の全国大会では、「万葉集の英語訳（1940）の千首選択についての考察」を発表している。

## 【研究発表論題と要旨】（第8会場：115教室）

2. 13:35 ~ 14:05

### 学生評価のためのデジタルツール

鈴木 規巳洋（藍野大学 准教授）

最近当該大学では語学クラスで1クラス50名から60名と学生数が増えてきている。30名前後が理想とされているが、そのような環境が確保できないクラスで、どのように学生評価を充実出来るのか試行錯誤の中間発表である。

講義形式や様々なアクティブラーニング形式において授業中に詳細な学生把握をしたい場合、学生の授業態度の記録は、日常不可能に近い。つまり授業中は単純に学生の学習態度の記録は頻繁にできないし、記憶としても多くは定着しない。特に目立たない学生は、日常の学習姿勢を思い出すことはできない。最近の1クラスの学生数増加はよりこの状況を難しくする。さらに当該学生の英語レベルは、比較的低い傾向にある。そのため中間・期末、それに小テストによる「点数評価だけ」では学生の英語クラスの評価は困難である。

この環境でより多くの学生をきめ細かく評価し「点数評価」と「日頃の積極性」も加味した形で総合的に評価する方法はできるのかがこの研究の始まりである。大人数でありながらも、日頃の積極性や努力度を開発PCソフトの援助で入力・記録するシステムをつくり、授業で利用し始めている。学期末にペーパー試験の結果と日常の学習姿勢を簡易に記録させることにより、学生の総合評価につなげることができるが、まだまだ入力の簡易さまでには至っていない。その中間報告をしたい。蛇足ながら学生の席替え機能もつけ、クラス環境のリフレッシュさには貢献している。

## 【研究発表論題と要旨】（第8会場：115教室）

### 3. 14:10 ~ 14:40

#### ロックハートコレクションの行方 — ケンブリッジ大学図書館までの道のり —

李増先（立命館大学 ポストドクトラルフェロー）

本発表はケンブリッジ大学図書館のロックハートコレクションを取り上げ、新出資料を用いながら、その来歴および学術的価値を明らかにすることを目的とする。

ケンブリッジ大学図書館の有する古典籍のほとんどはかつて個人が旧蔵していたものを大学に寄贈、あるいは買収されたものである。漢籍の場合はトーマス・ウェード卿(Thomas Francis Wade, 1818-1895)、ローレンス・ピッケン (Laurence E. R. Picken, 1909-2007) の旧蔵書を始め、和書はアーネスト・サトウ卿 (Sir. Ernest Mason Satow, 1843-1929)、ウィリアム・アストン (William George Aston, 1841-1911) の旧蔵書が大きな割合を占める。しかし、これらのコレクションと異なる経歴を持つものがあり、それは本発表が取り上げるロックハートコレクションである。

ロックハートコレクションは、全体約 200 点の和刻本漢籍を中心に構成された中型コレクションである。ジェームズ・スチュワード＝ロックハート卿 (Sir. James Haldane Stewart Lockhart, K.C.M.G., 1857-1937)、イギリスの外交官、漢学者。スコットランドのアーガイル地方の生まれ、幼少期をスコットランドで過ごした後、当時イギリスの植民地省の試験に合格し、中国に赴任した。

そこから、約 40 年間 (1880 年～1921 年の退職まで) 生涯の半分を中国大陸で過ごした彼は、当時イギリスの管領下に置かれた香港・威海衛の管理が任されていた。退職後はイギリスに帰国し、ロンドン大学東洋研究学院 (現 SOAS) 理事・王立アジア学会 (Royal Asiatic Society) 理事等を歴任し、中国関係の論文や著書を数多く発表した。没後に彼の旧蔵書がその遺産の管財人を通し、ケンブリッジ大学に買収されたが、その中身のほとんどが和刻本漢籍であることは注目に値する。

それに、ロックハートコレクションのもう一つ興味深い点は、該当コレクションはケンブリッジ大学が初めて出資し、購入したものである。この購入にあたり、大学は当時のイギリス大蔵省から資金を獲得し、購入に充てた経緯が残されている。

このような性格をもつロックハートコレクションについては、現在のところ先行研究は皆無である。僅かにいくつかの紹介程度の言及が確認できるものの、コレクションの性格・中身までは言及されていない。そこで、本発表はこの部分を明らかにすることを主要な目的とする。

さらに、ロックハート没後に蔵書以外の所有物はかつての母校である George Watson's College に寄贈され、現在イギリス国内の複数の研究機関に分かれて保管されている。本発表は National Library of Scotland にある新出資料を用い、コレクションの全貌およびその購入背景についても言及する。

## 【研究発表論題と要旨】（第8会場：115教室）

4. 15:00 ~ 15:30

高木八尺：アメリカ研究の展開と日本研究の可能性

小林 竜一（早稲田大学 国際言語文化研究所 招聘研究員）

新渡戸稲造と内村鑑三がアカデミズムにおける研究対象としての地位をすでに確立していることは今さら言うまでもない。しかし、たとえば高木八尺（1889-1984）など、新渡戸や内村の衣鉢を継承する直系の弟子に関する研究は緒に就いたばかりである。こうした現象は、学問の専門化や個別化であるとか、あるいは学統に関する問題意識の希薄化といった昨今のアカデミズムに瀰漫する兆候とも無関係ではないように思われるところであるが、後者の問題については暫く措き、前者については研究者が比較の手法を適用し、文学、思想、宗教、政治、経済、外交といった従来の学問領域を横断する視座を確保することにより、容易に克服され得る問題であると考えられる。

1924年に東京大学法学部において米国憲法・歴史及び外交講座を担当したという事実関係が誇大視された場合、高木は日本におけるアメリカ政治・外交史の開拓者として認識される存在にすぎない。しかし、いみじくも比較文化論の泰斗である島田謹二が言ったように、また新渡戸が実際にそうであったように、第一級の精神というものは狭義の学問分野にカテゴライズされることを峻拒する存在なのである。

無論、新渡戸同様、高木も第一級の精神の持ち主であった。それに、神田乃武を父に持ち、服部他之助にエマソンを学び、新渡戸にカーライルを学び、そして内村に贖罪信仰を学びというように、人格形成期における事実関係を列挙するだけでも、高木は比較文化論の研究対象として興味深い存在であると、そう認めざるを得ない。

本発表では、エマソンの受容やキリスト教精神との接触をはじめとする文化の領域から高木を照射しながら高木の対米観を包括的に捉えなおし、高木が示唆する日本研究の可能性について考察を展開したい。

5. 15:35 ~ 16:05

和辻哲郎の日本語論再考：「ある」と「こと」の意義

藤岡 克則（大阪産業大学 教授）

和辻哲郎は、1927年に文部省からの命により3年間のドイツ留学を経験した。帰国直後の1929年、和辻は『哲学研究』に「日本語に於ける存在の理解」という論文を発表し、1935年（昭和十年）に「日本語と哲学の問題」と改題され、『続日本精神史研究』におさめられた。

「日本語と哲学の問題」において、和辻は日本語の特質として、「純粹の日本語をもって書かれた文芸的及び歴史書が他に向かつて誇るに足るだけ豊富であるにかかわらず、同じく純粹の日本語をもって叙述された学問的思想の書がきわめて乏しい（p. 509）」と述べ、日本語は「概念を表示する語と体験を表現する語とがある距たりをもって対立し、日常語は学的概念に縁遠く芸術的表現に親近なる言葉として、依然として言語の純粹な姿を比較的素朴なまでに保つことになる（pp. 511-512）」と考察している。このことは、日本人の精神生活が「悟性的認識」よりも道德と芸術とを主たる関心としており、「このような『悟性的不熱心』というごとき特性を日本語の文法的構造のうちに顕著に見いだすのである（p. 512）論じている。

本発表においては、和辻が哲学者として考察した日本語の特質、特に（和辻の言をかりれば、）「日本語が実践的行動の立場における存在の了解を豊富に含んでいることの証拠しても解釈（p. 514）」することができるのと和辻が観察した日本語の文法的構造について再考し、和辻が問いかけた問題を言語学的に再度吟味してみることが目的である。

和辻は、「日本語が芸術的方向において著しく発展させられながら理論的方向における発展の可能性をただ可能性としてのみ内に蔵していた（p. 522）」とし、それでは、日本語で哲学の根本問題である「あるということはどういうことであるか」を問うことによって、和辻流のケーススタディを行った。

「あるということはどういうことであるか」という哲学的問いそのものに、その問いを形成する日本語自身の問題が含まれていると和辻が考察したことは、現代言語学においても、きわめて注目すべきであると考えられる。それらの問題とは、(1)「こと」の意義、

(2)「いうこと」の意義、(3)「いうこと」の主体、(4)「ある」の意義である。

「あるということはどういうことであるか」という問いそのものは、言葉としては日常的なものでありながら、そこに存在する言語学的意味はきわめて難解なものである。今から約90年前に和辻が思索した軌跡を辿り、現代言語学へと橋渡しを試みたい。

参考文献

和辻哲郎全集第4巻（岩波書店：1962）

6. 16:10 ~ 16:40

在日ブラジル人の自己確立  
— ある日系ブラジル人二世の事例から —

田中 真奈美（東京未来大学 モチベーション行動科学部 准教授）

1. はじめに

日本に在住する日系ブラジル人は、活動の制限がなく、取得も比較的容易な定住ビザを取得して来日している。日系三世まで定住者ビザが取得できるため、「出稼ぎ」のために来日する日系ブラジル人が増加した。主な就職先である大規模工場がある地域に日系ブラジル人の集住地区ができ、コミュニティが形成されている。日本で結婚し、家庭を持つ日系ブラジル人も増加している。本研究報告では、日系ブラジル人の民族アイデンティティと自己確立について、日系ブラジル人二世を事例として取り上げ、考察する。

2. 研究方法

本研究報告では、日系ブラジル人の集住地区の一つである群馬県大泉で生まれ育った日系ブラジル人二世に半構造化面接を2015年3月に実施した。調査者と研究対象者が自由に語る形式で実施し、約1時間程度を要した。研究対象者の大西さん（仮名）は、両親が「出稼ぎ」のために来日した日系人であり、日本生まれの日系ブラジル人二世である。ポルトガル語も堪能で、大学3年生である。

3. 結果と考察

大西さんは、日系ブラジル人の集住地区で生活し、多くの日系ブラジル人と関わりながら成長していたが、大学生になるまで日系ブラジル人であることを意識していなかった。しかし、将来の就職を考えた時、日系ブラジル人であることに誇りを持つようになり、日本とブラジルの懸け橋になるような仕事がしたいと思うようになってきた。将来の就職のためだけでなく、民族アイデンティティの確立のためにも、ネイティブレベルのポルトガル語を習得する必要があると実感し、学習を継続している。2015年の夏休みには、在日ブラジル大使館でインターンシップをすることができた。

日系ブラジル人二世で、日本の大学へ進学する人は少ない。大西さんも友人の中に大学へ進学した人はいないと話していた。大西さんの両親は、日本での生活には、大学を卒業することが必要だと考え、豊かではない生活ではあるが、金銭的援助をしている。大西さんは、両親を尊敬し、感謝している。良好な親子関係が構築されていることが分かった。

4. まとめ

本研究の聞き取り調査から、両親の教育方針でもあるポルトガル語・ブラジル文化教育を通じて、民族アイデンティティが確立されていき、日系ブラジル人コミュニティとの関わり合いなどを通じて、日系ブラジル人としての自己確立をしていったのではないかと推測される。なお、今後の課題として、様々なバックグラウンドの日系ブラジル人に聞き取り調査を実施し、相違点を明らかにすることに期したい。

## 会場校へのアクセス

### 【JR 弘前駅から大学までの地図】



### 【弘前駅周辺から弘前学院大学へバスで行く手順】

- (1) JR 弘前駅中央口バスターミナル3番乗り場から「小栗山行き」・「狼森行き」のバスに乗車。
- (2) 約15分後、「弘前三中校前」のバス停で下車。
- (3) バス停近くの歩道橋を渡り、「文京小学校」、「七瀬交番」のほうへ進み、左に曲がる。
- (4) 道沿いに進んでいくと左側にコンビニ（セブンイレブン）が見えてくる。コンビニが見えたら、左に曲がる。
- (5) 左に曲がった後、奥のほうに踏切が見えてくる。踏み切りが架かっている道を進む。
- (6) 踏切を渡った後、道沿いに進んでいくと、弘前学院大学の看板が見えてくる。

看板のところを右に曲がると、弘前学院大学が見えてくる。

※ バスの片道運賃は210円。時刻表については、以下のHPをご覧ください。

弘南バス株式会社：<http://www.konanbus.com/>

自家用車でのご来学はご遠慮ください。（駐車できない可能もございます）

### 【弘南鉄道中央弘前駅から】

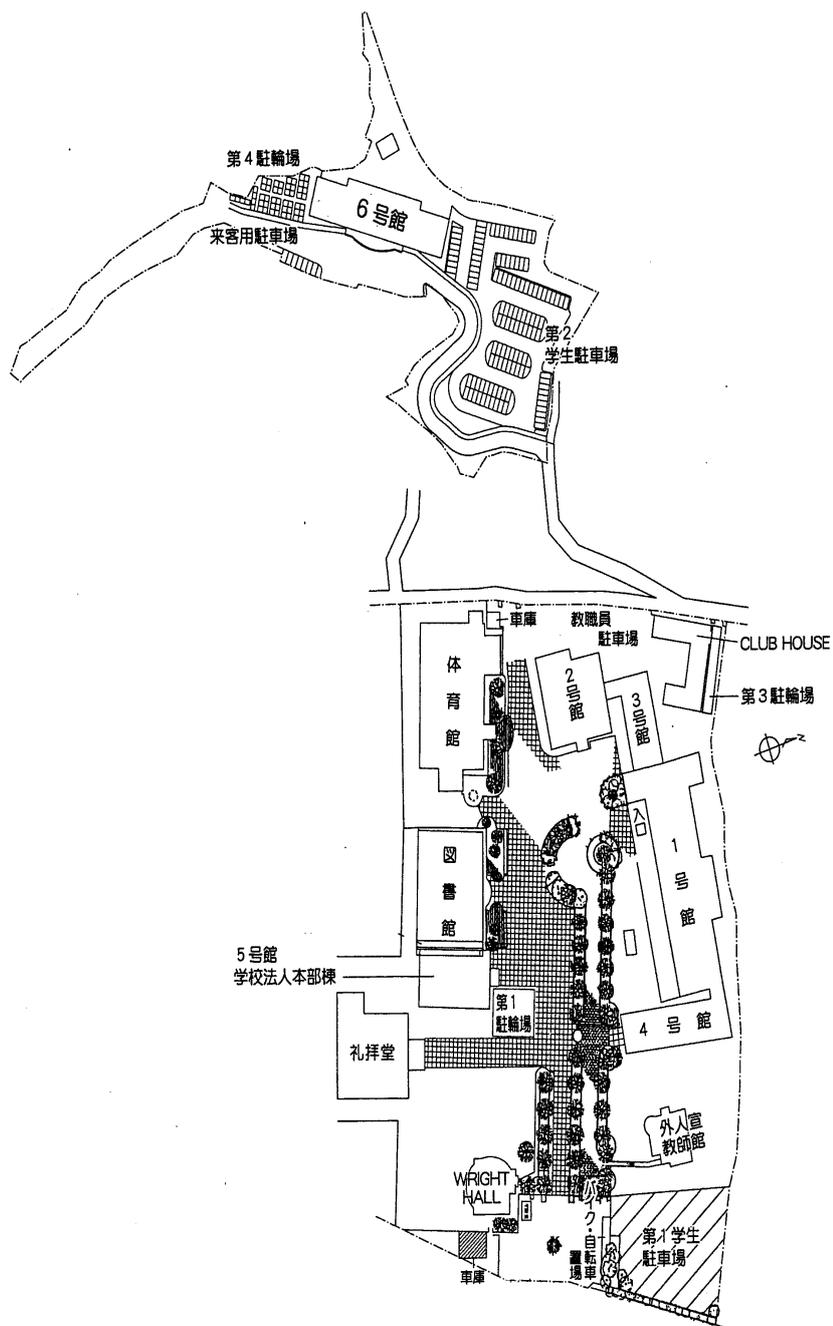
電車で約4分。弘前学院大学前駅で下車。片道210円。ただし、日中の本数は少ないので注意。

弘南鉄道株式会社：<http://konantetsudo.jp/>

### 【弘前駅からタクシーで】

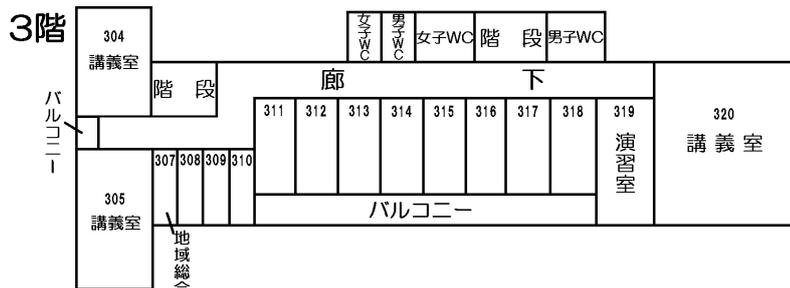
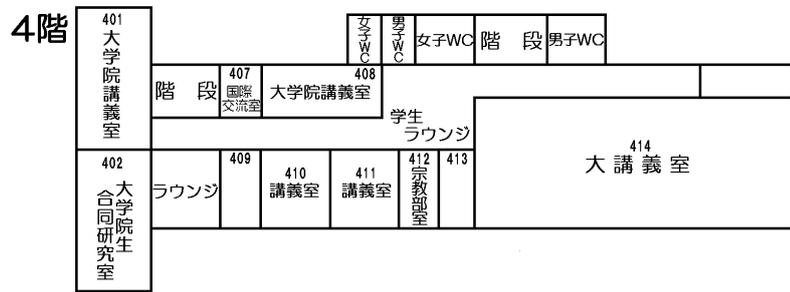
約10分から15分。片道約1,000円。大学からタクシーを使う場合、駅前タクシー：0172-32-0431が便利です。

### 【弘前学院大学キャンパス地図】

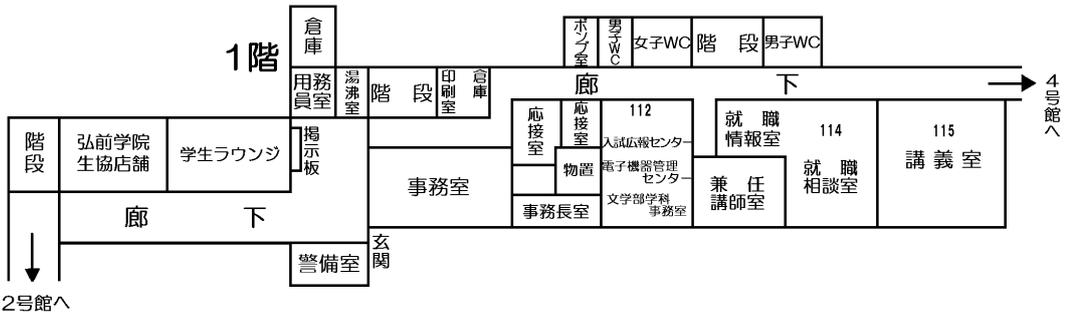
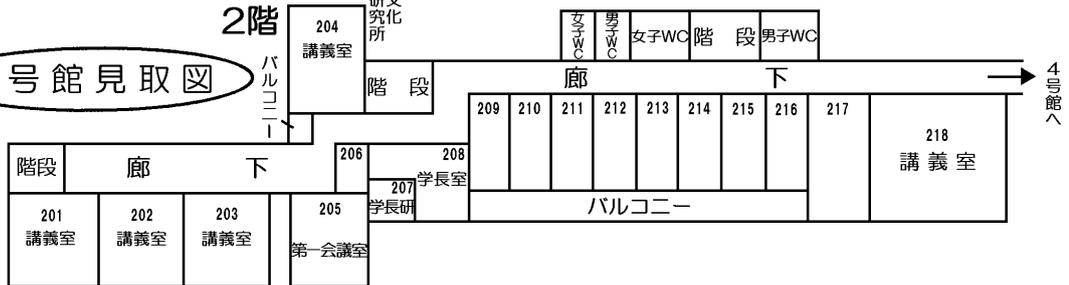


【大会会場の各教室案内】(1号館)

1号館見取図



3号館見取図



## 宿泊先（ホテル）について

学会開催時期と重なっているため、できるだけ早めに宿泊先を各自で確保されることをお奨めいたします。参考として、弘前駅周辺のホテルをご紹介します。

- ・ホテル ルートイン弘前駅前店 … (JR 弘前駅中央口から徒歩 3 分、TEL : 0172-31-0010)
- ・東横 INN 弘前駅前店 … (JR 弘前駅中央口から徒歩 1 分、TEL : 0172-31-2045)
- ・駅前ホテル ニューレスト … (JR 弘前駅中央口から徒歩 3 分、TEL : 0172-33-5300)
- ・ホテル ナクアシティ弘前 … (JR 弘前駅中央口から徒歩 1 分、TEL : 0172-37-0700)
- ・ブロッサムホテル弘前 … (JR 弘前駅中央口から徒歩 2 分、TEL : 0172-32-4151)
- ・ビジネスホテル新宿 … (JR 弘前駅中央口から徒歩 1 分、TEL : 0172-32-8484)

※お願い：弘前市からの補助金（5 万円）を獲得するため、申請準備をしています。提出書類のひとつに、県外宿泊者の氏名、所属、宿泊ホテルの名前のリストがあり、大会後に提出することになっています。大会当日、受付において、宿泊ホテル名をお知らせ下されれば、まことに幸いです。よろしく御協力くださいますよう、お願いいたします。

---

## 比較文化論 No.34

発行 2016 年 3 月 31 日

日本比較文化学会

### 本部事務局

〒574-8530 大阪府大東市中垣内 3-1-1

大阪産業大学

藤岡克則研究室内 日本比較文化学会事務局

第 38 回 日本比較文化学会全国大会（2016 年度国際学術大会）

### 準備委員会事務局

〒036-8577 青森県弘前市稔町 13-1

弘前学院大学 文学部 佐藤 和博

電話：0172-34-5211

Email：[sato@hirogaku-u.ac.jp](mailto:sato@hirogaku-u.ac.jp)

### 製本・印刷

(有)ササヌマ産業

〒036-8042 青森県弘前市松ヶ枝 3-2-1

Tel：0172-28-2333 Fax：0172-28-2398

---